

説法が解らぬ。實に盲者には日月の光を見せしめるに由ないことである。そこで薬山院主の間に答へていふ、「經に經師有り論に論師有り、争てか老僧を怪み得む」と、經文のことが聞きたいならば經師の所へ行くが可い、論部の講義なら又論師もある、別に此の老僧を煩はすにも及ぶまい。そんなら此の老僧を苦しめるなと云ふのである。經に經師、論に論師、是れ一能あり一務に歸する所の者である。老僧は即ち拙者閑なる底の人だ、老僧とは何だ、年を取つて頭が禿げた坊さんと云ふことではない。此の老僧といふやつは色々に化けて出る、或る時はコップともならう、或る時は時計ともならう、或は凸元たる山容を示めして説法することもあらう、又或る時は潺湲たる溪聲となつて説法することもあらう、或はまた濱の松風となつて説法度生の聲を成し、或は柳の糸と垂れては觀音微妙の相を現はすこともある。蘇東坡の偈に

鷄聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何舉示人。

とあるのは、即ち此の老僧に相見し得たる消息である。

頤は本則の事實を更に稱讚して云つたに過ぎぬ。「痴兒意、刻止蹄錢」今の院主以下の大衆は、薬山無聲の説法が解らず、斷えず説いて聞かして居るのに、尙ほ説いて呉れと懇願して止まぬ。だから啼く痴兒も同様である、仕方が無いから色々たたくらうして、それ錢を遣らうと黄葉を與へる。それで痴兒は喜んで啼きを止める、それが止蹄錢である。即ち已むを得ずして方丈を出て、座に墜り良久して座を下り、また方丈に歸るといふ、餘計なことをせねばならぬ。相手が痴兒であるから仕方がない、皆是れ止蹄錢である。「良駟追風鞭影」良駟も追風も古の名馬だ。阿含經には四通りの馬が説いてあるが、一番上等の馬は鞭の影を見ただけで馳る、次は鞭が毛に觸るれば馳る、次は皮を叩かれて馳る、最下等のやつは骨を叩いて始めて走るとある。また公案に外道問佛の話と云ふがあるが、或る時一人の外道が佛の許に至つて質問をしたことがある。外道と云ふと何だか悪く聞える語で、地方に行く人と人を罵るのに「此の外道」などと云ふが、外道といふのは佛門以外の修行をする人といふことで、外道

と雖ども中々豪いがある。此の佛に質問した外道の如きも中々豪い者である。問うていふには「有言を問はず無言を問はず」と、實に高尚なる質問だ。素人には一向要領を得られぬ。その時佛は只良久せられた無言で何とも答へられなかつた。スルと其の外道は「大慈大悲我が命運を開き我れをして得入せしむ」と、云つて非常に喜んで出て行つた、傍に之れを見て居た佛弟子の阿難には頓とわけが解からぬ。ソコで佛の前に出て「今の外道は佛の一言をも得ずして而も勇み喜んで出て行つたのはどういふわけでありませすか」と問ふと、その時の佛の答には「良馬の鞭影を見て馳るが如し」とある。此の外道は佛の無聲の説法を聴取し得たので、鞭の影を見たりけて駆け出す所の一等の良馬であつたのだ。此の一句は之れ等の故事を含んで居て薬山會下の大衆は、骨を叩かれねば走ることをせぬ驚馬ばかりであつたことが知られるのである。終りの二句は薬山の境界を形容したので「雲長空を掃ふ月に巢ふの鶴」月の中には兔が居ると云ふがこゝでは鶴が高き松の樹に巢ふといふ、實に清く高く何とも云へぬ、薬

山の境界を評したのである。「清寒骨に入つて眠成らず」清寒骨に入ると、實にサツバリとしたる境界になりきつて、何の執着も罣碍もないのをいふ。眠成らず、夢中に醒めて居る世の中の人多く眠る者が多ひ然も寢言をいふて居る理窟を捏ね廻はして居る連中は、常に眠つて居て寢言ばかり言つて居るのである。眠り成らずであるからして常に覺醒して居るので、薬山は即ち常不眠の覺者であると云ふ。眠つて居ては薬山無言の説法は決して解らぬ、ところが今日の満天下には白晝十字街頭に晴睡する連中ばかりである。乃木大將自盡の説法によつて須く目を醒ますがよろしい。

二、臺山婆子の一著

文字言句は實に門を叩くの瓦子であるから、禪はこれに拘はらず實地に修業して、自己の胸襟より眞實流出した處の、教外別傳不立文字でなければならぬ。併し文字が悪いかと言ふに、それは決して文字が悪いのではない、意圖言偏と申しまして、文字

言句は限り有るものにして、教理は實に無限である。有限の文字を以て無限の教理を現はす、それは到底不可能である、文字に現はれたる處、言葉で示してある處は決して教理の全體ではない、此文字此言句が既に教理である。禪の真味と思ふては、飛んだ間違である。併し文字言句も、門を叩くの瓦子、月を指すの指であるから、全然不必要とは言はぬ、或る程度までは勿論必要なものである。けれども門の中に入り、月を認めて了らば、既に瓦子や指に必要はない夜更けて人の門に到り、押しても突いても門を開かぬ、拳骨位で打つたのでは、家内に寝静まつて居る者は容易に眼をさまして明けて呉れぬ、其時には瓦を取つてドン／＼と叩けば直ぐに聞きつけて明けてくれる、門を開けて中に入れば最早や瓦に要はない。それを何時まで持つて居るには及ばぬ、疾く捨てて了らばよい、又あゝ彼方に好い月が出た、ドレ何處へと云つてもたゞアレ彼方にと云ふた丈けては埒があかぬ、其時にはソレ其方へと指を以て教へれば直ぐムン彼方かと解る、既に月のありかゞ解つて見れば指に要はない、たゞ月の有りか

を教へるまでの手段に過ぎなかつたのである。故に月を認めればサツサと指の方は願みぬ方がよい、斯く云へば、そんなら瓦子も指も最初から要らぬてはないかと云ふものもあらうが、否ながら門内に入り月を認めては不必要であるが、其門に入るまで月を認むるまでは實に必要である、これあるが爲めに入ることを得、これに依て月も認められたのである。要は此瓦子此指も其最初は必要なれども、たゞ之れに執着して何時までもこれに迷ふては不可ぬのである、故に道元禪師も、言語道断とは一切の言語是れなり、心行所滅とは一切の心行是れなりと示めされてある。

乃て從容録にある一則の公案を提唱して、此意を明了に述べようと思ふ。さて其公案と云つても多くの中から特に撰んだと云ふ譯けても何でもなく、只此則をこゝへ持ちだしたまでのこととあります、それで先づ垂示から本則、頌と順に御話しませう。

一

不_レ餐_二香餌_一 不_レ是_二嘉魚_一、不_レ透_二置罟_一 未_レ爲_二狡兔_一 却有_二神油_一 游戲_二底人_一 慶。

二、臺山婆子の一著

一八七

此垂示は面山老師の示されたものである。香餌とは香しきエバと云ふことであるが、此エバには衲はいろ／＼なエバがあらうと思ふ、先づ一寸數へて見ても、財色食名睡の五欲、此エバには誰れも迷ひ易い、金銀財寶の爲めには血肉も離間すると云ふ有様、次に色欲のエバには甚だ迷ふものが多い。而して田舎などでは、平生は餘り人の寄らぬ處でも、飲食物を出すとすると、直に押しかけて集まると云ふ有様。又次には名譽の爲め、これも至つてかゝり易い、何處でも名譽を得る爲めには財産も何にも質に入れて、それが爲めに妻子を路頭に迷はせると云ふやうなものも澤山ある。其次が睡眠であるが、こいつには直に人が引つかゝる、明朝は六時に起きやうと決心してねてもいざとなると、今朝は寒いから明朝からにしようと思ふて、七時八時までねて了ひ、明日になれば又明朝から、終には何うせ今月も半ばになつた來月からと決めやう、イヤ今年と云つてもモ一僅かのことだ、一層來年からと云つた様な調子で、睡眠欲には迷ふ者が多い。此五欲には何故か迷ひ易いのである。而して之れに迷はねば實

に嘉魚であるが、見渡す處悉く鈍魚のみ多いやうだ「透網の金鱗未審し何を以て食とせん」と云ふ如き、透網の金鱗は果して幾許かある、皆なこれ文字のエバ言句のエバにかゝつて居る鈍魚ではないかこんなことは何にも他人に依て直すことは要らぬ、自分を以て自分を見るが一番に好い、自分自ら省みよ、果して透網の金鱗か、エバにかゝる純魚か、衲共自身も、他人に尋ねるまでのことはない、自ら省みると、何うも香餌にかゝつて居ることが多い、こゝ一番御互ひに注意が肝要である。

次に「置罟を透らざるは未だ狡兎と爲さず」置罟とはアミの事である、狡兎とは小ざかしい兎のことで、置罟にかゝるやうな兎では、決してこれを小ざかしいと云ふことは出来ぬ、諸君は果してアミにかゝつて居らぬか、見渡すところ世間の人は皆なアミにかゝつて悶いて居る。而して其のアミにもいろ／＼ある、科學のアミ、哲學のアミ、或は悟りのアミにかゝつて居て、これを透脱することが出来ないて居る、これは決して狡兎とは云はれぬ、香餌にかゝらず、置罟を透脱して、眞に神通游戲底の人が

あるが何うか、神通と云つてもいろいろある、天眼通もあれば天耳通もあり、神境通、他心通、宿命通、漏神通等の六神通と稱するものがあつて、其天眼通と云ふのは、山河大地を隔て、幾千里先きのことでも居ながらにして見へると云ふ。我國では先年以來千里眼など、稱するものが現はれて、錫壺の中へ封じ込んだものを透視すると云ふが、中々それ處ではない。福來博士に聞いて見ると、新聞に出て居る千里眼などは實に當てにならぬものが多く、新聞には大層らしく出て居るから、イザ研究にと行つて見ると、千里眼でも天眼通でも何でも無い、實に飛んでもないものが多いさうであるが、又天耳通と云へば、今度は耳の方で、此處に斯うして居て、天井裏で蟻の相撲とる聲も聞き得ると云ふもの。他心通とは他人の心の中に思ふて居ることが何でも解ると云ふ。宿命通とは此の世のことではなくて、前世に何うであつた、斯うであつたと云ふことが一切知れる。漏神通とは有ゆる煩惱妄想を斷盡した境界であるとか云ふかゝる神變不思議なる神通、いづれも今日の千里眼以上である。

併しこれ等は成程神通には相違ない、否神通と云はゞ云ひ得るであらうが、それはホンの小神通であつて、今こゝで神通游戲底の人と云ふ、佛法の大神通は中々そんなものではない。何にも常人のなし能はざる神變不思議を以て神通とするならば、水中をくぐるには魚の方が餘程エライ、空中を飛ぶには鳥の方が上手である、天井裏へブラ下るなら蝙蝠には叶ふまい、地の中を行くにはモグラが上手だ、梁を渡るなら鼠眞暗の中で物を見るなら猫の方が遙に重寶だ。佛法の大神通とは、こんな馬鹿げたものではない、其の證據には、之等不思議を斥けた話は昔からいくらかもある。異僧と云ふて眼に見へぬ僧に或る時仰山が逢ふて、汝何れより來りしかと問ふと、印度から來たと云ふ、いつ頃印度を出立したかと云ふと、今朝出立して來たと答へた、幾百千里と隔つる遠方から、僅か三四時間の中以來たと云ふ不思議な僧、若し佛法で云ふ神通か不思議を談ずるものならば、仰山も汝はエライと云ふて驚歎せらるゝであらうが、決して、然らず、神通妙用は汝に還す、佛法は夢にだも知らずと怒鳴り付けた。神變

不思議のことにするのは、成程上手だが、貴様はそれでは佛法を知つたのではないと叱り付けたのである、是に於て異僧は何と答へたか、支那に來りて文殊を見んと思ひしに、此聖釋迦に逢ふと云ふて消え亡せたと云ふ。又黄蘗も異僧に逢ふたことがある嘗て川の邊で異僧に逢ふた、其時異僧は何の苦もなく笠を浮べて川を渡り彼方へ達したので、これを黄蘗は、ア、そんなことを早くに知たなら、貴様の足を打ち切つてやる處だつたと、云ふたので、彼の異僧はア、これはこれ真に大乘の法器なりと讚嘆したと云ふてはないか、然らば真に大乘佛教の神通とは如何なるものか、彼の臨濟も云ふてある如く、色境に入つて色に惑はされず、聲境に入つて聲に惑はされず、大自在を得るが真に佛法の大神通である。

而してこれは大修行底の人でなければ到底こゝに到達することは難い、如何なる人がまことに神通游戲自在の人か、それは今本則に擧げる處の趙州の如きが即ち其人である。趙州は實に辛苦して修行せられた人であつて、實參實究底の人であつた。修行

地に於ては、一日片時も光陰を空しく渡つたことがない。夫故かく神通自在を得られたのである、仇や愚かに思ふてはとも出来ぬ、故に道元禪師も、趙州は古佛なりと仰せられてある。諸人趙州の游戲底、神通自在底を知らんと要せば、本則に就てこれを見られよ。

三

舉臺山路上有二婆子、凡有僧問臺山路向什麼處去。婆云葛直去、僧纔行、婆云好箇阿帥又恁麼去也、僧舉似趙州、州云待與勘過、妙亦如前問、至來日一上堂云、我爲汝勘破婆子二了也。

臺山の一婆子、何うも根性の悪い婆さんである、時々斯う云ふ根性の悪い婆さんがあると思へる、徳山も矢張り餅賣の婆さんに苛い目に逢ふたことがある。即ち徳山が金剛經の註疏を澤山背負ふて南方に到る、或る掛け茶屋に休んだ、其時其處の茶屋の婆さん餅を賣つて居たので、徳山は時分はよし一つ買つて食はうと思ふて、婆さん

に餅を一つ賣つて呉れと云ふと、此婆さんは尋常の婆さんと一風違つて、ハイ何うも毎度難有うと云ふと思ひの外、餅の事は其方のけにして、お前さんは何處のお方で、其山のやうに背負つて居る荷物は全體何であると、妙なことを問ひ出した。

乃て徳山はこゝぞと鼻うごめかして、何お前はまだ私を知らぬか、私は徳山と云ひ一名を周金剛王と云ふて金剛經に通達して居ると云ふた。之れを聞いた婆さんエタリ顔つきて、貴僧が周金剛王徳山か、それでは其荷物はと問ふたこれは金剛經の註疏である、ア、左うですかそれでは一つ聞きたいことがあるが、貴僧は妾の問ふことを能く教へてくれたら餅を賣りませう、其代り若し答が出来ない時は、お氣の毒ながら餅を賣ることも出来ませんと、何か一物ありさうな氣味の悪いことを言ひ出した。

併し徳山はさるもの此婆さん何を云ふか、よし何んでも問ふて見なされ、婆さん然らばと云ふので、イヤ外の事でもない、金剛經の中に、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と云ふことがあるが、今貴僧は餅を求めて、何れの心を點心せんとする

のですか、妾が聞きたいと云ふのはこれ此の事でありませす、是に於て徳山ウンそれはと云つたが二の句が次げぬ。此體を見て取つた婆さんは、こんなことの分らぬのでは餅を賣ることは出来ぬと云ふて、サツサと道具を提げて歸つて了ふた。此に於て徳山は始あて自分の非を悟り、有ゆる經疏を焼き捨て、龍潭に到り、工夫修業して、一夜灯提を借し呉れと云ふて借り、龍潭が、灯提に火を點けて徳山に渡し、徳山が受取るや否やフツと吹き消した、其刹那に豁然として大悟したとのことである。

さて此の一段の因縁に依つて見るも、文字言句の阿米にかゝつて居ては駄目ではないか、又臺山と云ふ處は、兎角修行僧の問題を引き起す處である。今此本則にある趙州の師匠なる南泉が、同じく臺山のほとりに茅を刈つて居られた時、僧あり臺山の路何れに向つて去ると問ふた、すると南泉は右へ行つて左へ曲れとも何んとも教へないで、私の此鎌は三十文で買ふたのであると云ふ、僧は鎌ではない、臺山の路をと重ねて問ふと、ウム近頃は使ひ込んだら中々よく切れると、丸て聾の話し合ひのやうだ。

聾の婆さんが、鶏の鳴く聲が聞へないで、妾どもが若い時には鶏がよく鳴いたものだ
が、近頃では大きな口を開いてアクビする丈けだと云ふたとの話があるが、恐らくは
此僧南泉が折角親切に路を教へてくれて居るのも解らなかつたらう、今此則の婆さん
は中々甘いことを云ふ、慕直去と、慕直去とは真直ぐに行けと云ふことだ、何んでも
曲つてはいけない、真直ぐに行けくと、中々面白い、凡て此人間は真直ぐに行きさ
へすればよいのであるが、兎角有無差別の曲り路へ入りたがるものである、長安大道
は實に直きものだが、多くは踏みはずす人がある、歌に

ならばしな澤邊の蟹のよこにのみ

行けばゆかるゝみちはありとも

と、云ふのがあるが、世には蟹にならふて横に行く人が少くないやうだ。納は實に此
歌はよいと思ふて、常に思ひ出しては味はうて居る、何うやら真直ぐに行くことの出
來ぬものゝ多いやうなのは情けないことである。處て此僧、婆子の云つた真直ぐに行

けと云ふことが解らなかつた、真直ぐにと云ふことを知らなかつたから、僧が纒かに
行きかけると、婆さんは後を見送つて好箇の阿師又恁麼にし去れり、此間もこんな坊
主があつたが、ア、彼の僧も中人よしだ、又彼のやうにして去つて了ふたと云ふた、
乃て僧は真直ぐと云ふことが解らぬから、趙州の處へ行つて、實は斯様斯様のことが
ありましたと報告するに、流石は趙州、待つて與めに勘過せん、ウム左様か此狸婆々
マア待つて居れ私が其性根を見届けてやると云ふた。乃て趙州が婆子の處へ行つて、
前に僧が問ふた如く問ふと、果せるかな婆子轉處を知らなかつた。人を見て法を説く
ことをせず、趙州に逢ふても矢張り慕直去とやつたので、スグと脚下を見ぬかれて了
ふたのである。

來日上堂に云く、我れ汝が爲めに婆子を勘破し了れりと、趙州は實に閻王が罪人を
照して見ると云ふ淨玻璃の鏡を持つて居るか、之れに照して婆子の心のドン底まで直
ぐに見破つたのだ、夫れ故に能く婆子を勘破し了ることが出來た、例へば婆子はヤブ

醫の如く、趙州は實に大醫王である、婆子は應病與藥と云ふことを知らず、ドンナ病人にても同じ藥を投じて居るやうなもので、或る病人にはさゝめがあるが、他の爲めには何にもならぬ。これでは神通遊戲の人とは云へぬ、能くこの神通遊戲自在なるは唯だこれ趙州一人あるのみである。

四

年老成レ精不ニ謬傳、趙州古佛嗣ニ南泉、枯龜喪レ命因ニ圖象、良駟追風累ニ纏索、勘破了老婆禪、說ニ向人前ニ不レ直レ錢。

年老いて精となるとは楞伽經にあることだが、年數を経つるといふ／＼なことを仕出す、今は趙州のことを讚嘆しての語である。趙州は百二十歳までも生きたのであるから、實に年老いて精となつて居るのだ、昔しより謬つて傳へず、實に傳説の如く間違はない、其様にエライ趙州は全體誰れの法嗣かと云ふに、彼の有名なる、前にも一寸申上げた南泉の法を得たのであると云ふので、趙州古佛南泉に嗣ぐと師承を明ら

かにしたのである。枯龜命を喪ふのは圖象に因るが爲めて、龜は萬年の壽を持つて居ると云ふけれども、其甲を焼いて吉凶を占ふと云ふので、遂に殺される。吉凶を占ふことの出来るは誠に結構であるが、其爲めに身に害を被るは實は氣の毒なり。若し龜にして此事がなかつたならば、能く萬年の壽を全うすることも出来るであらうが、大抵それで命を喪ふ、此の僧も小利口ではあるが伶俐の爲めに却てツマヅク、良駟追風纏索に累ふとは、良駟とは名馬、千里の馬である。千里を走る處の名馬である追風も千里の名馬の走るのだから一層よく走る、誠に目覺しいもの、結構のことであるが、其の名馬も繩に引かゝつては駄目である、と之れは婆子のことを云ふたのである。婆子の如く良駟にして追風の勢はよいが、到々趙州と云ふ繩にかゝつてはモ一不可ぬスツカリ見破られて了つた、見破つて見ればナンの事もない、禪は禪だが老婆禪で一般に通用は出来ぬ。故に老婆子一人では得々として居るが人の前へ出して見れば、實に三文の價値もない、全く人前に説向すれば錢に直せずである。これでまづ一通り提

唱は終はつたのであるが、お互に徒らに文字や言句に迷ふて、分別袋に入つてはならぬのである、香餌を饗はず、置罟を透脱して、真箇の大乗佛法に於て、禪通游戲自在底の人とならんければいかぬ。單に自己一流の禪、自分免許の悟りては到底駄目である。

三、趙州大死底の消息

禪の本領とする所は、吾人の身心其儘を生きた佛法の器とならしむると云ふことである。詳しく云ふならば、吾人の日用の云爲動作を大道に合沓せしめ、日光中佛法と離れず、大道の相續者となつて行くこと云ふのである。宗門にてはこれを不染汚の行持と云ふ、行持と云ふは單に行ふと云ふ意でなく、佛法を吾物にした上の活機を云ふのである、この活機を縦横無碍たらしむるには、古聖先徳は如何ばかりの難行苦行を積まれたことを知らねばならぬ、今日の人々は兎角修行を等閑にして、理窟ばかり上手

であるが、理窟では禪の本領を會得するとは出来ぬ、往古の人々の修行振は如何であるか、從容録の一則を拈ずると仕様、

垂示

示レ衆云。三聖雪峰春蘭秋菊。趙州投子卞壁燕金。無星秤上兩頭平。沒底缸中一處渡。二人相見時如何。

本則

舉。趙州問ニ投子。大死底人却活時如何。投子云。不レ許ニ夜行ニ投レ明須レ到。

頌云

芥城劫石砂窮レ初。活眼環中照ニ廓虛。不レ許ニ夜行ニ投レ曉到。家音未レ肯付ニ鴻魚。三聖と云ふ人は臨濟大師の御弟子である。此の人臨濟の會下に於て得法の後諸國を遍歴して、仰山慧寂禪師といふ善知識の處に往つたとき、仰山「お前の名は何といふ」と問はれると三聖「慧寂」と答へた。「それは乃公の名だお前の名は何だ」といふと、

「私の名は慧然」と云つた。何だか空トボケたやうな問答だが、仰山は何も云はずに大笑して止んだといふ。作家と作家の出合は素人には何の事だか少しもわからぬ。臨濟大師將に遷化せられんとするに當り、三聖を召して、「我れ入寂の後我が正法眼藏をして滅却せしむること勿れ」即ち「我が佛法を斷滅せしむる勿れ」と遺囑された。三聖は「必ず相續して師の佛法を滅却せしむるやうなことはしませぬ」と立派に答へた。ソコデ「人有り即今問はゞ何と答へるか」と問ふと、三聖は力を込めて「喝！」と、大喝した。臨濟大師曰く「吾が正法眼藏は箇の瞎驢邊に向つて滅却し了る」と、口では大に落して實は大に喜ばれたのである。三代將軍であつたか亡くなられる時に子孫の者を呼び寄せて「我が亡き後は如何」と問はれると、「天下は大に亂れん」と答へたので、將軍は殊の外満足せられ安心して瞑目したといふ。即ち天下は太平だと思つて居ては油斷があるから亂れる本である、けれども天下大に亂れんと氣を緊めて居れば油斷が無いから天下は太平になるといふものである。それとこれは一寸似た話である。

兎に角臨濟大師が遷化の際に特に「我が正法眼藏をして滅却せしむる勿れ」と、付囑せられる位であるから、三聖の英傑であつたことが察せられる。

雪峰、此の人は修行には非常に苦辛した人で、三到投子九至洞山と云つて、投子和尙の處には三たびも行き、洞山大師の處には九たびも行つたといふ。非常に骨を折つて修行したが悟りを開くのは容易でなかつた。後に悟道して徳山と云ふ禪師に嗣法した、三聖と云ひ、雪峰と云ひ、嗣法の系統も正しく、力量境涯何れとも高下なるべくもない、此の二人が出合つて問答したことがある、三聖が雪峰の處に行つて「網を透る金鱗、未審何を以てか食とせん」と問ふた、網に引つかゝるやうな魚でない。網を突き破つて躍り出る活潑々地の金鱗は一體何を餌とすべきだらうといふ問で、自分は今網を通る金鱗だがサア如何であるなといふ意氣込である。網といふうちにも色々網があつて、或は文字理窟の網に引つかゝつて居る連中もあらう、或は財色食名睡の五欲の網にかゝつて居る者もあらう。佛法修行でも徒らに言葉の端につき廻されて

知見解會を以て得たりと思ふ輩は佛法中の網にかゝつて居る連中である。

息子が道樂で仕やうが無いので嚴父が強意見して「貴様のやうな奴は何處へなりと出て行け」と云ふ。息子は「それなら」と云ふので表口から出やうとすると「そこから出ては不可ん」と云ふ。裏口から出やうとすれば又「そこから出るぢやない」といふ。座敷の椽から飛び出さうとすると矢張り「そこから出るぢやない」と怒鳴る如何すれば可いかといふと。「貴様は馬鹿な奴だ、出て行けと云ふのは貴様を出すつもりで云ふのぢやない。出てゆけと云はれるやうなことをせぬ立派な人間に爲ようと思つて云ふのだ」と云ふ。此の息子は即ち言葉の網にかゝつて居て父の云ふ意味が解らぬのぢや何ても言葉の端につき廻はされて居ては眞の意味が解るものでない。今三聖は確に此の網なるものを透りぬけて活躍自由の境に到つて居ると云ふのである。然るに之れに對して雪峰は何と答へたかといふと「網を出て來らんを待つて汝に語らん」と、何の事か一方は網を出て來たといふのに、コチラでは網を出てお出でなさいといふ。最

も網を出たと殊更に力を入れて云ふのは眞に網を出て居ないのかも知れん。本當に出たものなら出た〜と云ふ必要はない筈である。網を出たのはよいが、出たといふ網にかゝつて居ては尙ほ本當ぢやない。三聖此の答を聞き猛虎の怒り狂ふやうな勢で、「一千五百人の善知識話頭だも知らず」即ち「雪峰々々と音に聞えた千五百人の大衆の頭になる善知識でありながら、今この一聖と問答する状態ではまるで口のきゝやうも知つて居らぬわい」といふので、三聖の機鋒實に當る可らざる勢である。處が雪峰は「老僧住持事繁しイヤおれは忙しいのでお前の云ふことを聞き違へたかな」とスラツと體をかはしてしまつた。悟りは斯う來なくては本當ではない。君子の容貌愚の如く魯の如しといふ、この如くといふのが六かしい。世の人は如くてなしにほんとの愚魯になるから困る。如くといふのだから眞の愚魯ではない。故に擧手投足すべて道に外れず、而もそれが如何にもらしく角立つのでなく、渾然として璞の未だ磨かざるが如く、何とも奥の伺ひ知られぬ風があるといふのでなければ眞の悟りではない今雪峰の

様子が丁度それである。此の雪峰も今は修行が積んで三聖に對する態度がまことに穩であるが、未だ若い時分には中々勢が鋭かつた、曾て洞山の會下に於て典座と云ふ役——山の食物のことを司る役をして居た時、一日米を淘て居るところへ洞山大師が來られて「米を淘て砂か砂を淘て米か」と問をかけられた。雪峰「砂米一時に去る、——米だの砂だのとまご／＼して居ない。」凡聖迷悟絶對待である」と答へた。洞山更に、「大衆箇の何をか喫す」と問ふに雪峰何も云はずに盆を覆却すとある。トコロが洞山大師は綿密の師家であるから雪峰のやりかたは氣に入らぬ。「汝は他日誰かの下に在つて悟道するであらう」と云つて許されなかつた。雪峰は果して洞山の機に合はず、後徳山の許に至つて法を嗣ぐととなる。修行が老熟の境に至つては玉の盤に走るが如く宛轉滑脱なるべきであるが、若い時分にはこの雪峰や三聖のやうな氣象がなければ駄目である。此の雪峰と三聖との出合は何れをそれと優劣がない、春蘭と秋菊とのやうであるといふ。

趙州と投子、此の趙州といふ人は、六十にして始めて發心出家した實に珍らしい人であるが、發心したとき誓て曰く「我が知らざることは、三歳の童兒と雖も就いて學ばん、我が知れることは八十の老翁と雖も之れを教へん」と誠に結構な言葉で、人は誰も斯うありたいものである。趙州は南泉といふ人の弟子となり、二十年間非常な勉勵をして、八十の歳に寺を持つて大勢の坊さんの世話をして、百二十歳にして遷化せられた人である、投子禪師は翠微の無學禪師といふに法を嗣いだ人であるが、博學な人て始めは華嚴經を觀て性海の道理を悟つたと云つて居たが、從に無學に見えて遂にその法嗣となつた人で、二人とも祖席の英雄である。

卞壁燕金とある、卞壁とは彼の有名の卞和の璧のことで秦の十五城に換へるといふ寶王である。燕金とは燕の昭王が黄金を臺上に置いて、天下の賢者を招いたといふ故事で、卞壁燕金共に天下の至寶である。趙洲と投子とは丁度この卞壁と燕金との如く亦優り劣りはないといふ意味である。「無星秤上兩頭平。沒底缸中一處渡」とある

無星秤とは星の無い秤のことで、それが兩頭平なりといふから輕重の無とをいふのである、沒底缸とは底の無い船のことで、底の無い船に智者と智者とが乗り合ふといふのだから面白い、全體此の世のことは皆底の無い船のやうなもので、因縁所生法我説即是空と説き、又は金剛經に「世界世界に非ず之を世界といふ」と云ひ「應に住する所無くして而も其心を生ず」とあるが如し、お互に皆沒底缸中の乗り合ひをして居るものである。更に之を考へると、投子趙州の二禪師は妄想の底が無くなつたことを云つたのだと見ても可い。さて此の二人の出合は余程面白いであらう、その面白い話が即ち本則に出て居るのである。

趙州が投子の處へ行くと、投子が油買ひに出て油の容器を手にかけて歸つて來た。趙州は之れを見て「久しく投子と聞く、到り來つて箇の買油翁を見る」とやつた投子は答へて「汝買油翁を見て未だ投子を見ず」といふ。趙州「如何なるか之れ投子」とそのまゝ付き入ると投子は油壺を高く上げて「油々」と云つた。それより此の本則の

問答になるのである。「大死底の人却て活する時如何」と、此の大死底の人には中々なれぬ、大死一番大活現成と云つて、死人で生きてゐる人にならねばならぬ。全體生まれたと云つてそれが生きて居るわけではない、死んだと云つて死んだのでもない。この死んだ生きたの境を超越した達人にして始めて大死底にして却つて活する底の人である。此の大死底といふ方のみで活するといふことが無ければ、所謂昏沈病に墜する、活のみで死の方がなければ散亂の症になる。今趙州は「大死一番大活現成した、即ち昏沈を離れ又散亂を離れて居る」といふ意氣込みである。スルと投子は「夜行を許さず明に投じて須く到るべし」と、こそこそと夜行さしてはいかぬ、曖昧ではならぬ、ハッキリと夜が明けてから堂々として出といふ。夜行は即ち大死底の方、明に投ずるは即ち活する方で、語は異ふが兩者共昏沈散亂二つ共離れた達人と達人との出會である、故に之を下壁燕金互に優劣なしと評され居るのである。

頌に云く「芥城切石妙に初を窮む」と、芥城とは東西四十里南北四十里の大きな城

の中に芥子が一杯入つて居るのを、天人が百年に一度降りて来てその芥子を一粒づゝ運ぶ夫が無なつたのを一切といふ。劫石とは四十里四方の大きな石を天人が百年に一度降りて羽衣でスツと摺り、その石が無くなつたのが一切だといふ、何れも非常に幽久無限廣大無邊の意味で、妙に初めを窮むといふのはズツと佛法の根元奥妙を窮めたといふことを形容して、この二人を讚めたのである。「活眼環中廓虚を照す」といふ、環は端無きの謂、廓虚は廓然たる大虚空のことで、前の句で大死底になりきつたことの形容、此の句は大活底の形容と見るべく、「夜行を許さず曉に投じて到る」といふのは、本則の語を繰り返したに過ぎぬ。「家音未だ肯て鴻魚に付せず」といふ、鴻魚といふのは手紙のことで、漢の蘇武が匈奴に捉はれて二十年の辛苦を嘗めて居たが、鴻とは大なる雁のこと此の雁の足に手紙をつけて漢によこしたといふ故事、それから又或る女は匈奴に捉はれ亦鴻の首に文を結んで放したところが、その鴻が漢の地に到り水を飲まんとしてその文が水に落ち、それを魚が呑み込んだのを、女の父が偶然に

もその魚を捕つて料理せんとするに當り魚腹よりその文を得て、わが女は未だ無事であつたかと喜んだといふ。鴻魚はつまり手紙のことである、投子の家を訪づれたがその家風は中々手紙のやり取り位でわからぬ。直ちに訪れて直に知る。而も分明の消息唯投子と趙州とのみ之れを知る、衲も亦今語んと欲しても語ることは出来ない、諸人は如何が會するか須く仔細に參究すべきである。

四、正法眼藏涅槃妙心

宗門で禪と云ふ事を申すが、禪と云ふ事は至極廣い意味である、禪と云ふと六度の中に禪波羅密といふものが一つ有るが其の禪ではない、或は又佛教の中に三學といふことがある。所謂戒、定、慧と云ふのであるが、此の三學には佛一代の經文は皆是の戒定慧の三學に這入つて了ふのである。今衲が云ふ坐禪は六度の中の一つの禪を言ふので無く、亦三學の中の定學の一つを言ふのも無い、三學の功德も六度の功德も皆

悉く其の功德を含蓄して居る正傳の禪を言ふのである。御經て阿耨多羅三藐三菩提と云ふ是れ禪の異名であつて、曾て釋尊が迦葉に法を授ける時に「我に正法眼藏涅槃妙心有り」と言つて、附囑したのが、所謂是が宗門といふ所の坐禪である。釋尊は正法眼藏とも涅槃妙心とも云つて居るが、宗門ではそれを坐禪といつて居る、其の坐禪の異名は實に澤山にあつて、大般若經の中には「三昧、王三昧」と云ふてある、法華經の中には「無量義處三昧」と云ふてあり、或は華嚴經を見ると「海印三昧」とも言つてあるが、之れ皆宗門の坐禪の事である。達磨大師は此の坐禪の名前を「凝住壁觀自なく他なく凡聖等一」と申して居られる。達磨大師より六番目の大鑑慧能禪師謂ゆる六祖大師にして、俗に云ふ米搗親爺なる人であるが、此御方は「本來無一物、何處惹塵埃」と言つた、之れも矢張り坐禪の名前である。

斯の如くにして禪の名稱は澤山にあつて、衲の云ふ所の坐禪は六度の中の禪波羅密の坐禪でもなければ、戒定慧三學の中の定學を言ふのでもない、禪波羅密も三學も八

萬四千の法門なる佛教を悉く含蓄して、餘さず洩らさず佛教の功德は悉く集つて居るのである。全體坐禪といふ名前は適當ではないと思はれる、坐禪といふと六波羅密の一つになる、正法眼藏とか、涅槃妙心と言つた方が宜しいと思ふ、正法眼藏と云つたならば、各宗各派は悉く此の正法眼藏の中に具はる、涅槃妙心と云ふのは佛心のことであつて、佛の心より各宗各派は皆別れて來たものであるから、涅槃妙心の中には各宗各派皆這入つて居ると言つても宜しい、又正傳の坐禪と云ふことは釋尊より二十八代目の達磨大師、それより第六代目が大鑑慧能禪師、その慧能禪師の下に青原行思といふ人と、南嶽懷讓といふ二人の御方があつて、それより禪が分れて來たのである。而して此の禪風の盛んになつたのは達磨大師の時には盛んで無い、達磨大師の御弟子の二祖慧可の時にも盛んで無い。三祖の時にもさふ盛んでない。四祖はどうも山へばかり這入つて居つて、唯自分一己を修めたる氣味があつて是れも盛んであつたとは言へない。五祖弘忍禪師の代になると大變に禪が盛んになり來つて、其の會下には神秀上

座と言つて七百人の首席を占めて居られた人であるから餘程盛んになつた、其の次の六祖に至つて非常に禪が盛んになつて来て、今申す六祖の下に青原行思と南嶽懷讓といふ人が同時に出来た、青原の下に石頭和尚、石頭の下に藥山和尚、藥山の下に雲巖和尚、雲巖の下に洞山和尚、此の洞山といふ御方は衲等の宗門で中興の祖師と云つて宜い位、兎に角斯く歴々が揃つて現出せられた、又南嶽の下には馬祖、其の下には百丈其の下に黃檗、其の黃檗の下に臨濟といふ和尚が現出して、此で臨濟宗と曹洞宗とに分れた。一方には青原、一方には南嶽、其の南嶽懷讓の方が臨濟宗の方になり、青原行思の方が曹洞宗の方になるのである。

次に禪に五家の宗風と言つて五つに分れた其の事も詳しい事は此に略す、其の五つとは偽仰宗、法眼宗、雲門宗、曹洞宗、臨濟宗是れが即ち禪の五家と云ふのである。併し乍ら元來是れ一佛法であつて、禪が幾つに分れても元とは一佛法である。禪風と云ふものは、其の師家の手段に依つて禪の舉揚が違ふ、禪の舉揚が違ふと云ふのは人

を接得するに付いて、師家々々の手段舉揚が違つて来たのである。佛四十九年の説法に於ても、病に應じて藥を施す、所謂應病與藥或は機に應じて接得する、應機接物であるから、假令禪が幾つに分れて居つても元は一佛法である。衲が考へるに禪風といふものは、直截と宛轉との二つであらうと思ふ、宛轉の宗風と直截の宗風とある、直截と云ふのは丁度敵の陣中に不意に突撃して行つて、敵の大將の首を生捕つて來るといふやうなのが即ち直截である。宛轉といふのは段々と陣を排立してすつかり敵を圍んで了つて、順次に敵を塵殺にするやうなのを云ふ。所が今日どうかすると直截の方に唯傾いて了ふ人が有り、又唯宛轉の方に傾いて了ふ人が有るだらうと思ふ、それは偏狹である、矢張り禪の宗師家となつた者は、直截にして宛轉の働きの無ければならぬ、又宛轉にして直截の働きのなげねばならぬ。昔の人は直截と宛轉と兩方を相ひ兼ねて居る。

臨濟宗に於て風穴といふ人がある、是れは臨濟宗でも實に有名な御方であつて、早

く言ふと直裁の方の人である、直裁の方の人であるけれども、此の人の接得の仕方は誠に宛轉の様子が有る、それは如何なる譯かと云ふと、風穴の語に斯く言ふて居る、「木鷄啼ニ子夜、獨狗吠ニ天明」木で拵へた鷄が夜半に啼いた、すると藁で拵へた狗が天明方に吠へて居る、何とも是れは分別の附けて見やうが無い、無念とするか有念とするか、即ち子夜に啼く處の鷄は木鷄だから無念とするが、天明に吠ゆる處の狗は獨狗といふから無念とするか、有念無念に墮ちず、何とも思慮分別する事の出来ない様子がある、所謂宛轉の様子が有る、宛轉とは珠を盤に轉がすやうに引掛りの附けやうが無い、語句分別を以て説明しやうと思つても説明が附かない。此風穴といふ人は平生の手段は直截であるけれども、接得は宛轉の手段を以て人を接得して居る。一人にして直截であつて宛轉の働きを持つて居る是れでなければ眞の宗師家とは言はれまいと思ふ。

又曹洞宗に於ても、有名な船子といふ和尚がある、此の船子和尚は、支那の三武の時に僧侶を皆還俗させるといふ沙汰が有つた、其の時に此の人は河の渡場にて船守をして居つた、船子が友人に言ふのに、誰か好い人が有つたならば己の所へ寄越して呉れ、どうか法を嗣ぐ弟子を拵へたいから好い人が有りしならば差向けて呉れと頼んだすると或る人が夾山和尚が學問もあるからして是れが宜からうと、夾山を船子和尚の處へ遣す、夾山和尚が船子和尚の處へ其の人の指圖に依つてやつて來た、すると船子が夾山に向つて「絲を千尺に垂れて心深潭にあり釣三寸を離れて一句を言へ」と云ふ其のとき夾山言はんとすると船子が棹でイキナリ夾山を水の中へ突き落して竿で叩き込んで了つた、夾山が水中より面を出すとサア言つて見る、顔を出して何か口をモゴ／＼すると又叩き込んでしまつた、二度共船子和尚が夾山和尚を叩き込んだ、三度目に顔を出した、サア言つて見ると云ふ時に夾山が此の事のあることを首肯した、船子は是れを見て「竿頭の絲線は君が弄するに任す清波を犯さず意自ら異なり」と證明した、前に投げ込んだ時と今度は大變に違つて居ると言つて、法を夾山に嗣いで船子は

直ぐに船を被つて死んで了つたとある。是れは實に有名な話で何人も度々聞きし事と思ふ。

是の船子といふ人は宛轉を唱ふる人にして曹洞宗の人であるけれども、夾山を二度も水に叩き込んだのは荒つばい接得の仕方である、昔の人は船子和尚も或は風穴和尚も、直截にして宛轉の働さがあり、宛轉にして直截の働さがある。是の如く兩方相備へんければ眞の善知識とは言はれまいと思ふ、どうかすると直截ばかりに墮ち、又宛轉にばかり墮ちて了つて居る風があるが、兎に角禪を學ばんとする人は、偏狹に傾かざる様に心掛ける事が必要である。

五、佛と衆生と同か別か

佛とは悟り抜いた人といひ、衆生といふは迷つた人を言ふのである、一口に言つたならば迷つた方の側を衆生と云ひ、悟つた方の側を佛と云ふ。釋尊が一見明星と云つ

て、十二月八日曉の明星の出られる處を見て、豁然として悟つた、其の時の言葉に、「有情非常、同時成道、草木國土悉皆成佛」とある、釋尊が初めて星を見て大悟徹底せられた、此の大悟の語に依つて見ると、情ある者も、情なき者も、山川草木に至る迄悉く皆我と同時に成道したとある、此に到ると皆佛ならざる者は無い、今悟つた眼を以つて世界を見ると、一人も迷つたものが居らぬ、衲等は釋尊に依つて已に佛なることの證明を受けて居る、吾人は佛と違つた事は無いと釋尊が證明して居る、大智禪師が釋尊が悟られて山から出る處の像に對して、其の轉結の句に「下山路是上山路、欲度衆生無衆生」と言つて居る、成程釋尊が山へ上つた道も、悟つてから歸る道も悟つて見れば道は一つである、何んとかして迷つて居る衆生を濟度してやらうと思つたけれども、悟つて見ると濟度すべき衆生は一人も有りはしない。皆悟つて居る皆佛ばかりで一人も迷つて居る衆生はない。斯く大智禪師は言つて居る。

全體人の本性と云ふものは、吾人でも佛でも違つた事は無い、皆佛であるから今日

の人々が吾人は佛なりと確固たる自覺を持つて居りしならば、決して悪い事は出来な
い、それが佛と云ふ自覺が無いから人道に外づれた事をする、新聞などを見ると随分
立派な人が恥かしい様な事をして居る。人道を外づれた事をするのは、我は即ち佛な
りと云ふ確實なる自覺がないからであると思ふ。六祖大師も、「汝等諸人自己即ち是れ
佛なり」と、言つて居られる、我は即ち佛なりと云ふ自覺にあらば、如何なる事が
あつても、悪い事は出来るものではない。圓覺經にも「始知衆生本來諸佛」とあ
る、衆生といふ者は今日始めて知つた、本來佛であるといふ事を言つたのである。又
華嚴經を見ると「一切衆生具如来智慧德相」とある、智慧も徳相も佛と變つた事は
無いと言つて居る、その下の句に「唯因ニ妄想執着ニ證得」と言つてある。唯妄
想執着の爲めに佛と衆生と相容れない、妄想執着の雲が晴れて了ふと、衆生と佛とは
全く一つの物だとある。又臨濟大師の言葉にも、「大唐國裏に不悟者を求むる得難し」
とある、支那四百餘州の内に迷つて居る者を求めやうと思つたけれども、一人も迷つ

て居る者は無い、皆悟つた者ばかりと言つて居る。

或る時曹山大師の處へ或坊さんがやつて来て、「如何是佛」と問ふた、大師曰く、
「充餘塞溝」と答へられた、餘に充ち溝に塞がるが如く、佛は宇宙に一パイにな
つて居る、佛はどんな處へでも現はれて居る「大絶ニ方處ニ細入ニ無間」佛と云ふも
のは大きな上からいふと天地を包んで居る、小さい上からいふとどんな小さい所の毛
孔の中へも這入つて居る、世界中に佛の居ら無い處はない、此の處には人が見て居ら
ないと云ふが、人が見て居らないかも知れぬが佛が見て居る、如何に暗い所でも、如
かに汚ない處へでも、佛の現はれない所はない、佛は必ず見て居るに相違ない。併し
乍ら此の佛は平等なるものであるが、縁の力に依りて種々なる差別界に現出するもの
である、差別界の其の儘が即ち佛の姿である、或は洋盃となつて現はれ、或は水注子
となつて現はれ、皆悉く佛の當相と知れば一枚の紙でも粗末には出来ないのである、
葉一本でも粗末には出来ない、佛が縁に觸れて姿を變へて、或は山と現はれ、或は川

と現はれるのである。夫れ故に曹山大師は窟に充ち、溝に塞がると言つたのである。又普勸坐禪儀の一番初めの方に「道本圓通」といふ事が言つてあるが、道といふものは、本と圓通無碍にして少しも差支ないと云ふ事を言つたので、之れは道の本源より示したものである。道と云ふものは實に圓通なるものである。「道本圓通争てか修證を假らん」と言ふ詞に就いて、ことによると誤りを生ずる、何故なれば、本分なる道の根源には修證は假らんけれども、今日の人は修行をせねば道本圓通の處に到ることは出来ぬ、なる程道の本源の處は本分の處だから、修行功勳といふものは飛び越へた話であるからして、道本圓通争てか修證を假らんと云ふたのである、次に「全體遙かに塵埃を出づ」といふのは、吾人の自性天地の大精神といふものは、固より塵埃を出て居る自性清淨心である。故に「孰か拂拭の手段を信せん」と言ふたものである。其次には、「大都當處を離れず、豈修行の脚頭を用ふるものならんや」とある、大都當處を離れずとは、どう云ふ處であるか、吾人の御飯を喫へる所、御茶を呑む處、一步く

あるく處、寝る處、起る處、面を洗ふ處、即處々にチヤンと道本圓通の處もあれば宗乘自在なる處もある、全體遙かに塵埃を出るといふ消息もある、吾人の寝る處起る處にちやんとある、故に「大都當處を離れず」と云ふてある、當處を離れて別に佛道は在りはしない、道元禪師は佛道は遠方にあらずして、人々の脚跟下にあると仰せられて居る。

玄沙和尚は三十の年まで親爺と二人で漁をして居つた、或る晩に親爺と二人で平常の如く南臺江へ魚を釣りに行つた、すると親爺が過つて水に落ちた、落ちると南臺江の水は急流だからそれつきり流れてしまつた、其の落ちたるところをちよつと見ると其處に月影が映つて居つた、其のときに玄沙が「一切諸法水中の月の如し」と云つて己も是れから、出家しやうと決心して、それより出塵の志を起したといふことである。併し之れまでに餘程佛敎を聞いて居つたかも知れないが、親爺を救はうと思つて其處を見ると月影ばかりである、其れより發心して雪峰山へ行つて、坐禪をやつたけ

れどもどうしても悟れない、或るとき一つ餘處の方へ身を轉じたらば、宜からうと思つて山を下つて来た、其の下山の途中でちよつとした機會に石に躓いた、其の時に痛かつたと見へて、忍痛の聲即ちイタヒイタヒと言ふ刹那「此身有にあらず痛何よりか生ず」と斯う悟つた、此身體は全體有るもので無い、此痛何よりか生ずるの「何よりか」といふ處に大變力が有る、石より生じたか、又は身より生じたか、石より生じたとも言はれない、身より生じたとも云はれはしない、「此身有に非ず痛何よりか生ずる」と、悟られたのである。

納等の宗門で面山和尚と云ふのが有るが、其の師匠に填翁和尚といふ人があつた、或る夏の暑い時に、西瓜を一つ買つて師匠を喜ばせやうと思つて、持つて歸つて其西瓜を冷たい水で冷して大概冷やけたと思ふ時に切つて、師匠に献じた、師匠も喜んで喰べたし自分でも喰べた、師匠の言ふのに此の味は言ふに言はれん程甘い、此の味は全體何處から出て来たかと填翁和尚が問ふた、此の味は舌の方から出て来たか、西瓜の方

から出たか、西瓜ばかり有つても舌がなければ分らぬ、舌ばかり有つても西瓜が無ければその味は無い、此味は何處から来たかと云ふ問ひである、面山和尚が「因縁所生法」と答へた、それは因縁に依つて生じた、西瓜と舌といふ物の因縁に依つて味といふものが出たと云つた、その時に填翁和尚がそんな事は理窟であると言ふ、それでは何より生じたのでありますかと云ふと、その「何によりか」の處より出たのだと答へられた、實にそうである、是は西瓜より出たの、舌より出たの、因縁所生法なぞと言ふのは唯理窟である、唯それだけの話では何でもないが、何處より生ずる、何より生ず、その何よりの處を合點しなければ、此の處の味は實に言はれない、何よりかといふ處は人々喫却して其の味を知らねばならぬ、此の味何よりか生ずるといふ處の響を聞かんければならぬ、其の響は説明の及ぶ處では無い。

元曉大師が、或る時に修行に出掛けて野原に迷つてそこらに家は無し、墓場に入つて、自分の疲れた腕を枕にして臥んで、夜半に眼を覺すと大變咽喉が渴いた、さて此

處らに水は無いか知らんと思つて見ると、其處に實に美しい清水が有て、月影が映つて居る、直に掬つて呑んであゝ甘い、是れは難有いと言つてそれを呑んで又寝入つて了つた、夜が明けて昨夜の水は何んであつたか知らんと思つて能く見ると髑骸の中に溜つて居つた水であつたので即時に氣持ちが悪くなつた、其の加減か嘔きさうになつた、其時に「心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す」と、淨穢不二の道理を悟りて、是れより修行する事は要らぬといふので寺に歸へられたとある、「大都當處を離れず」て佛道は人々の脚跟下にあるので、唯此方が迂濶りして居るから分らぬ、處で衆生と佛とはどれ程違ふかと云ふに、佛といふ方は内に向つて本心を照し、衆生は外に向つて萬境に走るといふ、是れが即ち悟と迷との別れる處である、衆生は外に向つて萬境に走るとは、先づ自分で試験問題を掲げて自分を試験して見ると分る眼で色を見る、色を見て色に執着するかせぬか、鼻で香を嗅ぐ香に執着するかせぬか、耳で聲を聞く聲に執着するかせぬか、六根が六塵に對して始終縛られて居るではない

か、是れが他より見ては分からんが、自分で試験をして見ると、始終落第する人があらうと思ふ、人から見ると好い顔をして居るけれども、實に六根が六塵に對して始終縛られて居る、或は「獨り立て八風吹けども動ぜず」といふ言葉がある、その八風とは何んであるか、一つには利風の爲には精神までも奪はれる、利風には動き易い、二つには衰風、人間と云ふ者は衰弱して劣つて來ると精神がぐらつく、三つには毀風、眼前でそしられると動く、四つには譽風、眼前で譽められると多くは精神が動く、五つには稱風で、陰で譽められると直に精神が動く、六つには譏風、陰でそしられると動く、七つには苦風で、苦に逢ふと動く、八つには樂風、樂みに逢ふても動き易い、此の利衰毀譽稱譏苦樂の八つの風に動かされないやうになつたら佛と言つても宜しい「獨立八風吹不動」と口で言ふことは易いが、實際に入風の爲めに動ぜずとなるのは中々六ヶしい、聞た聲に縛られ、嗅だ香に縛られ、食た物に縛られ、始終縛られ通しに縛られて居るのが人間の有様である、所謂外に向つて萬境に走るのである、自分の

氣に入ると、貪欲を起し自分の氣に入らぬと瞋恚を起す、妄想がかたまつて愚痴となる、是は迷の基である、之を貪瞋痴の三毒といふ、貪欲の者は餓鬼となると言つて居る、餓鬼といふものは始終呑みたい、食いたいといふのが餓鬼である、程よく喫べて居れば宜しいが、遂には呑み過ぎ食ひ過ぎる、是れが所謂貪欲である、法華經の中に「諸苦所因貪爲本」とある、貪欲多き者は餓鬼道に墮つるに相違ない、瞋恚の多き者は修羅道となる、貪瞋痴の三毒が高まると戦争が起つて来る、併し此瞋恚といふものに二つある、慈悲の上から起る瞋恚と、怨みの上から起る瞋恚とである、慈悲の上より起るのは親が子を叩き、又は怒り付けるが如きは慈悲から起る瞋恚であつて之は悪くは無い、且又瞋恚が起りても他が謝すれば瞋を止めなければならぬ、梵網經の中には、「善言懺謝すれ共瞋で解けざれば菩薩の波羅夷罪」とある、人が前非を後悔して直ぐに怒りを解て了ふ怒りかたは餘り罪にもならぬ。

月潭和尚は、西有禪師の就かれた師家であつて大變短氣な人であつた、或時小僧が悪事をした、すると月潭和尚棒を持つて子僧を追ひ詰めた、其の時子僧が梵網經の中の善言懺謝すれ共怒りて解けざるは菩薩の波羅夷罪なりと言つた、すると月潭和尚が棒を振上げて居つたけれども、小僧の言つたのを聞いてハ、アと笑つて止めて了つたといふ、怒りても斯くの如き風になりたいものである、瞋恚の深き者は修羅となり、愚痴の深き者は畜生となる、愚痴といふものは道理の分らないものだ成程畜生は道理が分らぬ、愚痴の多き者は畜生になるであらふ、是れが所謂貪瞋痴の三毒といふ、此三毒の爲めに佛と衆生との二途に分かれる、佛と衆生とは天地の相違を生じて来る、其の貪瞋痴の爲に精神が晦まされて來れば、佛と衆生と云ふものが隔りを生じて來るのである。

六、佛法は近きにある

元來貪瞋痴の三毒は吾人の常に御飯を喫べる上にもある、如何となれば何か甘い物

があれば喜んで澤山喫べる、是れが所謂貪欲である、處て無味い物を少し喫べても直に顔色が違ふ、是れ即ち瞋慧である、酒吞が酒を澤山呑んでは悪いといふ事は知つて居ても、矢張り澤山に呑む之れは愚痴である。

昔印度の或王が婆羅門と羅漢とを招いて、御馳走をしたと云ふ面白い話がある、國王が真中で御相伴をした、一方には學者の波羅門、一方には悟つた羅漢である、大變に御馳走を出した、すると學者の波羅門は一口喫べて大變是は美味しい斯んな甘い物は喫べた事が無いと御世辭を言つた、羅漢の方は甘いといふ顔付もしないで、別に御世辭も言はない、國王は波羅門の方の了簡は分つたが、羅漢の方の了簡は分らぬ、今一度招んでみようと思ひ招待の約束をした、今度は無味い物ばかり出して國王はちやんと見て居ると、波羅門は一口喫べると怒つたやうな顔付をして、口には言はないけれどもこんな無味い物で人を招ぶには及ぶまいといつたやうな顔付がある、羅漢の方は無味いといふ顔付もしないで、前の通りに喫べた、前に甘い物を出した時と同じ事

だから羅漢の了簡がどうも分らぬ、故に國王は羅漢に向つて、お前は甘い物を喫べる時の顔付きも、無味い物を喫べる時も同じであるが、全體お前の了簡が分らぬと言ふと羅漢は「比丘の口、竈の如し」と言はれた。

此比丘の口竈の如しとは實に名句である、成程竈といふ物は旃檀の薪をくべても喜んだ事はない、又拾つて來た芥をくべても怒つた事はない、涅槃經の中には、釋尊が善きに於ても、惡きに於ても増減を生ぜずと説てある、全體此の貪瞋痴の三毒といふ物を自省して見ると、佛と衆生とより分れて來たと云ふことも自らわかる、法華經に斯う云ふ喩がある、謂ゆる長者窮子の事であるが、或る長者の息子が自分の一念迷つた爲めに遂に家出をした、即ち他國踰跢の窮子となつたと云ふことがある、長者の息子でも一念迷ふと、他國踰跢の窮子となるのである、何んとなれば本性の上より言へば、佛と衲共とは變りはないけれども、迷へば佛と千萬里の隔りとなる、悟れば直ちに家督を相續する息子となるのである、本性の上には佛と違つて居ないけれども、一

念食瞋痴三毒の爲に、遂に究子の乞食となつて六道に流浪するのである、而して六道に輪廻して苦より苦に入り、迷より迷に入つて了ふ、處が今の長者窮子が方々乞食して、廻り廻つて自分の家に行つた、すると親爺が之は己の處の悴に相違ない、此方へ呼べと言つた、乞食は斯う云ふ立派な家へどうしましつてと言つて逃げた、彼は悴に相違ないけれ共多年流浪して、乞食じみて心が卑劣になつて了つた、それより段々手段方便をなして、毎日庭の掃除をさして居る中に、長者の一人たることを知るに到り、そこで長者より家督相続をしたといふ喻がある、丁度衆生と云ふものは斯うして、佛と隔つて大變流浪して居るけれ共、是より段々と修行して行く、初めて本性に返る、其の返つた時即ち佛の法を嗣ぐ、所謂世間の話で言ふなら跡目相続をする事になる、是れが生佛不二、佛と衆生と元と一體のものであるから本性の處に返つて來るのである。

道元禪師は「修せざるには顯はれず、證せざるには得ることなし」と、元より吾れ

は佛である、佛であるが修行せんければ本分は現はれない、實にさうだ、燐寸は火を含着て居るが擦らんければ火は現はれない、衲共の本性は佛と少しも違つた事は無いが、修行せねば佛の處に到ることは出來ぬ。

修行をする事に付いては雪峰程苦勞をした者はないと思ふのである、此雪峰が教魚山巔て雪に阻てられて、毎日山中に修行をして居る、毎日坐禪を專一にする、同參の巖頭といふ人はモウ悟つて居るから、毎日高軒をして眠つて居る雪峰が言ふに前さんは毎日安心して居る、私の爲めに世話して貰ひたいものだといふ、其の時巖頭が「撞眠し去れ」と言ふと雪峰が「實に胸中未穩在なり」と、私の胸は張裂けるやうに思ふと云ふと、巖頭が言ふには、それではお前今まで經歷した事を皆話せ善い事は己が證明してやる、悪い事は己が洗却してやる、雪峰が言ふには、私は初め鹽官和尚の處へ行つた、すると鹽官和尚は上堂せられた、高い處へ上つて法を説かれた、其時般若の色空の道理を説かれて、初めて五蘊皆空の事を合點しました、巖頭が

言ふには「こゝ去て三十年人に向て擧著すること勿れ」人に向つてそんな話をす
 るなと言つた、又雪峰が私は洞山の過水偈を見て大に悟る所がありましたと言つた、
 洞山和尚が水を渡る時に自分の影が映つた時の語で、其偈の中に「汝是れ彼に非ず、
 彼れ正に是れ汝」と云ふてある、又其偈の初めの句に「一切に忌む他に向つて覓むるこ
 とを、超々として我と疎なり」とある、佛法は他に向つて求めてはならぬ、自分の胸
 中に向つて求めるが宜い、自分の足元に向つて求めるがよろしい、向ふに求めるから
 得られない、即ち超々として我と疎遠になつて了ふ、此の偈を見て大に悟る所があり
 せしたと言つた、すると巖頭が「自救不了」と言つた、貴様一人を救ふ事も出来ず、
 況んや人を救ふ事など出来るもので無いと言つて許さぬことである、それから又雪峰
 が私は徳山和尚の處へ行つて「從上宗乗中の事學人還て分ありや」といふ問を起し
 た、さうすると徳山がイキナリ棒を以て柄を打つた、其の時丁度漆桶の底の抜けたや
 うな心持がしたと言つた、すると巖頭が言ふに「門より入るものは家珍に非ず」六根

なる眼耳鼻舌身意より這入る物は本當のものでは無い、本當の寶ては無い、「自己の胸
 襟より流出して蓋天蓋地せよ」自分の腹から出て來ねば駄目だ、聞いたものは何の役
 に立つもので無い、自己の胸襟より流出して蓋天蓋地せよと言つた、其聲で雪峰初め
 て悟つた、其時に連聲叫んで曰く「師兄今日鰲山成道、師兄今日鰲山成道」と叫んだ
 其の時には實に愉快で堪らなかつたらうと思ふ、此時に雪峰が初て眞實の境界に到つ
 たといふ事である、古人は如是修行には誠に苦勞したものである。又長慶の慧稜と
 いふ人が、矢張り修行には苦勞した人である、慧稜の修行に苦勞したることは有名な
 ものである、此人は座蒲團を二十枚坐破したといふ事が書いてある、或る時僧堂に簾
 が下げてある、最も夏は簾、冬は帳が下げてある、自分で其の簾を巻き上げて、天下
 を見た時に悟つた、其の偈が面白い「也太差也太差、捲起簾一見天下」若人問解何
 宗旨拈起拂子「臂口打」といふのである、也太差といふは也太だ差ふて、今まで違つ
 た事ばかりやつて居つたが、今日簾を揚げて悟つたものだから捲起簾一見天下と申

した、其時には自分は實に愉快であつたらうと思ふ、若し人何の宗旨を解すと問はゞ拂子を拈起して臂口に打たんと、酷く叩くことを臂口と言ふ、何う云ふ事を悟つた、どんなに悟つたかといふ事は自分に説明の出来るもので無い、それは叩くより外仕方が無い、酷く叩くと臂と口が開く、酷く叩くことを尻から烟が出る程叩いてやると云ふ、それで酷く叩くと烟が出ると言ふ、何の宗旨を解すと問はゞどんな事を悟つたといふ説明など出来ない、打叩いてやるより仕方が無い、又洞山大師が水を渡つて悟つたのは、油断をしないからである、是は禪ばかりの話ではない、佐々木志津磨と云ふ人は、牛涎の地に曳くのを見て、懸腕直筆の法を悟るとある、直筆とは筆を堅て、書くので、成程牛は斯んな風に涎曳いて行くと、それを見て志津磨は懸腕直筆の法を悟ると書いてある、大雅堂といふ人は夏、田舎道を通つた時に、草の中に蛇が居る、其蛇がピツクリして匍匐つて行く、あの力の這入つた蛇の姿勢を見て、大雅堂が書法を悟つたと書いてある、或は釋の懷素の草書といへば有名なものであるが、其の手本を

見ると夏の雲のやうである、あの人は夏雪の閃き、夏の雪のムクムクと出る處を見て草書三昧を悟つたと云つてある、是は何だといふも皆油断をしない處から之を得るのである、或は靈雲といふ人は桃の花を見て悟つた、桃の花は毎年々々開くが、誰も悟る人はない、それは修行せないからである、其偈を読んで見ると、靈雲といふ人は悟る前に毎日どれ程刻苦したかと云ふ事が分る、「三十年來尋劍客幾度葉落又拔枝自從桃花一見後直至如今更不疑」と言つた、此靈雲といふ人は坐禪のみして、學問した事はないやうに思ふが三十年來尋劍客で、我等も皆立派なる寶劍を持つて居るが、それを知らずに居る、此の三十年來劍を尋ぬるの客、毎年々々劍を尋ぬるから葉落ち又枝を抜くと云ふ、昔し刀鍛冶に桃氏あり、桃の花の開く處を見て、初めて桃氏に逢ふのである、三十年來尋劍客といふ様に、修行に骨を折つて居つたといふ事は是れて分る。

磐山の寶積禪師は托鉢をして歩いて居ると、或る所て豚肉を賣つて居るのを見た

夫れを買いに行つた人が、「清底一片を研り將ち來れ」新しい肉を賣つて貰ひたいと言ふと、豚屋の亭主が言ふに、私の處には腐つた肉は無いと言つた、其の聲を聞いて磐山寶積禪師は悟つた、即ち豚の肉を見て悟つた、して見ると佛法といふ物は何處にても在る、成程曹山大師が如何なるか是れ佛と問はれた時に、谷に充ち溝に塞ると云つたやうなもので、佛は何處にても居るから氣を附けて油斷をせずに行くと、水を渡る時に佛に御目に懸る事も出来る、或は桃の花を見て佛に御目に懸る事も出来る、油斷をして居ると佛に御目に懸る事が出来ない、修行はそれだから油斷といふ事が悪いのである、古人は油斷をしないからして、事に觸れて悟ることが出来るのである、それゆゑに修行と云ふものは必要なるものである。

七、佛理に順ずる心

本體の上から云へば、我々も佛と何も變つた事はないけれども、佛は内に向つて心

を照し、衆生は外に向つて萬境に走る、夫れ故に悟と迷とに分れる、迷つた以上は是非共修行せんければならぬ、修行すると云ふ事は矢張り坐禪をする事を云ふのである、道元禪師は修行に付いて「修行は堅き物を研る如し」と、斯くの如く示めされてある彼の堅き物を研る時には、直に研れるものではない、堅い物は撓まず、段々にやつて行かんければ研れるもので無い、修行も丁度堅き物を研るやうなものである、是れは修行即ち坐禪ばかりではない、凡て何にをするにも油斷すると成功は出来ない、丁度玉子を温めるやうなもので、鶏が玉子を温める時には油斷しない、若しも油斷をなせしならば貝割と云ふことはない、修行も其の通りである。

彼の支那の脇尊者と云ふ人は八十の年に出家をして、其の當時は近所の人々の嘲笑を受けた、併し此の脇尊者は三年間横になつて寝ずに、晝間は經論を研究し、夜は坐禪して、遂に三命六通八解脫を得た人である。三命とは六神通の中の一命勝れたのが三命である、八解脫といふのは悟つた事を云ふそれで三年の間脇席に着かずして、遂

に脇尊者と人に言はれるやうになつた。衲等の持居る血脈の中を見ると傳燈の祖師となつて居る、一心專向の力と云ふものは必ず成功するもので、何も年を喰つたから出來ぬと云ふ事はない、彼の百丈慧海禪師といふ人は九十六歳まで生きた人である、衲の宗門では知識になつても、動靜大衆に一如すると云つて、知識になつても若い坊さんと一所に掃除をしたり、田畠等も耕し、其暇に修行する、所が此人九十歳の時分若い坊さんが、之れを氣の毒だと思つて、或る時百丈慧海禪師の掃除用の道具、鎌だの、鍬だの、箒だのといふ物を隠して了つた。百丈慧海禪師は其日一日飲みもせず、食ひもせず居た。其時に百丈慧禪師は「一日不作、一日不食」と云はれた、私は一日仕事をしない、故に今日一日は飲みも食ひもしない。これは百丈の有名なる話である、して見ると此の精神といふものは全體年を喰ふといふ事は無いと見える、若い者でも随分情弱な根性を持つて居る人がある、年をとつても逆も若い者が叶はぬやうな精神を持つて居る者がある、修行といふものは何も老若男女を擇ばない、自分で何でもしや

うといふ一心專念の力を以てやれば出來ぬといふ事は無い、修行するには必ず油断をしてはならぬ。

大般若經の中に「三昧王三昧」と云ふ事を云つて居る、是れは坐禪の事であつて、三昧にも百八三昧ある。其の三昧中の王の三昧と云ふのが王三昧である。或は法華經に無量義處三昧と云つてある、是れも矢張り坐禪の事である、皆佛法を悉く坐禪の内に入れて了ふ。衲共の宗門で坐禪と云ふのは、所謂三昧、王三昧、無量義處三昧の事を言ふのである、又華嚴經を見ると、海印三昧と云つてある、之れも坐禪の異名と見ても差支ない。之れを語を換へて申せば、達磨大師から三代目の御方が「一切諸法、悉皆解脱」と云つてある、一切諸法と云ふのは、現象界の有らゆる物を指して言ふので、其の一切諸法は悉く皆解脱だと言つてある、其の解脱と云ふのが、所謂坐禪の事になるのである。今扇子を佛教の説から言ふと、因縁或は緣起と言ふ、扇子は紙ばかりで出來るものでも無ければ、又竹ばかりでも出來るものでない、或は要めばかりで

出来るもので無い。人間の手も要れば、又刃物も必要である、色々な因縁縁起が集つて扇子一本でも起つたものである。此の扇子の縁を離して見ると扇子は無い、竹は竹に還し、紙は紙に還し、象牙は象牙に還して了つたならば扇子といふ物は無い、其の有様が即ち解脱である。一切の物は皆其の通りであつて、故に一切の物は無自性である、と云つて居る、其の自性の無い物が皆解脱だと云ふ、是れが即ち坐禪と云ふ事になる、して見ると此の世界は皆是れ坐禪の現れだと云つても宜い、衲共は生れると同時に早や禪を具有して居る、世界が開けて行くと同時に、禪を具して居る、人間生れると共に解脱の方法が具つて居る、然らば修行と云ふ者は不必要であると、思ふかも知らんが、決して修行を怠つてはならぬ、修行せなければ禪は現れるものではない。唯説明を聞き、講釋を聞いて、以て自分に安心が出来るものでない。

古人は參禪問道は戒律を先きとせよ、と云つてある、又道元禪師は、禪は何時でも禪戒一如で無ければならぬと言はれた。戒の行く處に禪が行かねばならず、禪の行く

處に戒が行かんければならぬ。如何にしても禪と戒とは一如でなければならぬ。本業瓔珞經の中に「佛家に住するには戒を以て先となす」とある。佛の家に住するには戒法が先きである、佛弟子となりて、自分の心を決するには、先きに戒法を受けねばならぬ。先づ第一に十六條の戒法を受ける、其の戒法を受けて初めて出家と定まる、戒に依て出家の位地が定まる。それより坐禪をして行くのである、之れは古人の言葉であるが「世間何物が最も樂しき」と云ふと「善をなす最も樂し」と答へた。その最も苦しい事は何にかと云ふと、其の反對は惡を爲すのが最も苦しい。佛敎で善と云ふ事を本業瓔珞經に「理に順じて心を起すを善と云ふ」と云つてある、理に反さしならば是は惡である、然らば理といふものは何んであるか、佛敎から言ふと戒が理と云ふものになる。理と言ふものは絶對平等なるものである、更に語を換へていふと、理と云ふものは、佛敎では所謂佛性と言つても宜い。佛性に順する心を以て行ふを善とすと言つても宜い。其佛性の現れたものは何にかと言はば、戒である。禪宗では戒は戒

定、慧と言つて、是れが備はらなければ佛教では無い、此の戒、定、慧の三學でも、戒が一番になつてゐる、禪定、智慧此れが備はらんければ、佛教では無い、禪宗などは、戒法は要らないと言ふ人は大に間違つて居る。

そこで戒と云ふ事を約めて云つたならば、三聚淨戒となる、一體戒法と云ふのは、茲にコップが有れば、必ずコップにはコップの則がある、其則が即ち戒法である。物あれば則あり、天は高く覆ふて居る。地は卑く載せて居る、是れ皆戒法である。故に戒といふものは天地の開くと同時に具はつて居る。三聚淨戒といふのは、第一が攝律儀戒、此の攝律儀戒といふのは、早く言ふと悪い事をするなといふ事である。第二に攝善法戒といふ。是れは善い事をせよといふ事になる。第三が攝衆生戒と云ふ、是は何でも人の爲めになれと云ふ事である。之を一口に言ふと、悪い事をするな、善い事をせよ、人の爲めになれ、是れ三つであるけれども、全體一つである。悪い事をせぬと言つたら、其の時に善い事といふものが直ぐ具つて居る、善い事をすると言へば同

時に、人の爲になる事も具はつて居る、故に三つであるけれども一つである。此の攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒といふものを、今一つ喩を以て言ふと、攝律儀戒といふのは、丁度橋が腐つて悪くなつて通れないといふのが攝律儀戒、其腐つた橋を取替へて立派な橋が出来たといふのが攝善法戒、今日橋の渡初て多くの人々が橋を渡つて皆喜ぶ、即ち人の爲になるといふのが攝衆生戒である。戒法に付いて尙ほ分析して言へば殺生戒、殺生といふ事は慎まんなければならぬけれども、是れは無益な殺生の事である。然らば戦争がありしならば如何にすると云ふと、それは少數の者を殺して、多くの者を助けて行くといふのが、矢張り佛教の中にある。彼の宣戰の御詔勅にもある通り、東洋の平和を圖らんが爲と宜へ玉ひて、段々幾ら道理を説いて聞かしても、向ふが分らんければ仕方が無い、平和の爲には戦をせねばならぬ。何も人を殺す爲ては無い、人を助ける爲めに戦争をするのである。夫れ故に少數の者は殺してなりとも、多くの者を助けて行くことは何も悪い事は無い。彼の寶積經を見ると此の事を書いてある、

五百人の商人が、或る海邊へ珊瑚樹を探りに行つた。すると珊瑚樹が澤山あつて、どの商人も之を探つた、其中で悪い奴が一人あつて、計略を以て是れ丈けの人間を殺して了へば、是れ丈けの物は己の物になつて了ふと云ふ悪い了簡を起した。此の中に又善心を起した商人があつて、彼奴は悪い奴だ、計略を以て我々を殺して了つて、珊瑚樹を取らうと思つて居る、あの悪い人間一人を殺して了へば、我々は皆助かつて了ふと思つた。是は其時分に釋尊の説法を聞いた人と見える、釋尊の説法を聞く人と人を殺す者は、地獄に墮るといふ事を言つてある、己は地獄に墮ちても宜い、大勢の者を助ける爲に、一人の悪い奴を殺すのであるから、己は地獄の先達になつても宜いと云つて、遂に殺して了つた。而して釋尊に逢つて、私は常に御説法を聞いて居ります、人を殺す者は地獄に墮るといふ事であるけれども、今日は悪い了簡の奴が一人あつて、多くの者を救ふが爲めに遂にそれを殺して了つた、私は地獄に墮ちますかと言ふと、釋尊は其時にお前は地獄には行かない、殺生ではあるけれども大慈悲心がある。一人

を殺して多くの人を助けやうといふ、慈悲心の上からの殺生であるから、それは破戒にならぬと言はれた。故に佛教の殺生戒を受けて戦に出たならば、其者は殺されても黙つて居るかといふとさう云ふ譯では無い、無益な殺生はせぬがよい。然らば蟲までにも同情を以て見たならば、矢鱈に無益の殺生は出来ぬ、生命の惜しいといふ事は誰も同じ事で、以如なる物でも生命は惜しい、我身を抓つて、人の痛さを知ねばならぬ信州の一茶といふ者が「やれ打つな蠅は手を摩る足を摩る」と言つてある。殺生といふ事は親に心配を掛けて、親が病氣になつて死ぬのも矢張り殺生戒を犯した事になる。殺生といふ事を或る本に斯う書いてある、昔佛教が盛んに行はれ、不殺生戒といふものが盛んに行はれた時には、死刑に遭ふ者が少いといふ事を書いてある。今日になつて見ると新聞に毎日切つたり、撲つたりすることが澤山出て居る、矢張り其殺生戒を慎んだならば、或は動物全體を虐待するといふ事も餘程薄らぐてあらうと思ふ。佛教に於ては何でも殺生するなといふ事では無い、無益な殺生を戒めてある。世界は皆

佛性といふもの、現はれたもので、佛性が色々な姿になつて現はれて居る、故に佛性は一つの物で一佛性である、それが所謂理に順ずるのである、平等佛性の上から言ふと如何にしても是は殺されるもので無い、若し殺されるものといふと、佛性が佛性を殺すのである。禪戒から言ふと、殺すことは出来ないものである。

八、我相を離るゝの道

人間といふ者は、盗みといふ事が有つては、理に順ずるとは言はれない、昔寶間比丘といふ人が有つた、其の寶間比丘といふ人が、釋尊の處へ行つて、私は佛法を悟りたいと思ふが、如何にせしならば宜しいかと、問へしに、釋尊が言ふのに「我物に非ざれば取る事勿れ」自分の物で無ければ取るな、之れを聞きし寶間比丘は歸つて來て坐禪をして考へた、己の物とは何であるか、己の物で無ければ取るな、官職であるとか、俸祿だとか、家屋だとか云ふ物は、皆出家して見ると、己の物では無い、是は

取る可き物で無い。妻子眷屬なども出家して見れば何も己の物では無い、是れも取る可きもので無い。然らば己の身體はどうである、此の身體も己の物では無い、親から貰つた餘肉である、親より貰ひ受けた預り物も同然である。此の身體は親の丹精で色々な縁に觸れて、飲料であるとか、食物であるとか親の丹精に依つて身體が大きくなり、終りの果には此の身體は破壊して、亡くなつて了ふ物である。此身體が壊れて了へば何も取る可き物は無い、して見れば此身體は全體己の物で無い、取る可きは更に無い。香嚴大師は、竹の聲を聞いて悟つた人であるが、此人の偈に「百計千謀只爲身、不知身是塚中塵」と言つてある、此の意味は、どうか長生きをして、美味い物を食たり飲んだり、暑い時には暑く無い處へ行き、寒い時には寒く無い處へ行つて、百計千謀只身の爲にし、長生きをしたいと云つて身の爲にするが、自分の身體は何であるかといふと、皆墓場の中の塵で、皆墓場の土になつて了ふのである。如何なる人でも墓場の土には間違なくなる、中には石塔になると云ふ人が有るが、石塔にもなれ

ない人が有るかも知れぬ。なぜならば好い息子が有れば宜しいが、息子が悪いと石塔も拵へてはくれぬ、石塔にはなり難い人はあるけれども、墓場の塵になる事は間違がな
に、次に轉結が面白い「勿言白髮無言語。箇是黃泉傳語人」とある、即ち白髮が黙
つて居ると言ふな、向の黃泉から迎ひに來た、我々の頭に白髮がはへたら、黃泉より
の傳言であると思へ、それを又出山和尚が直されたのに「勿言黒髮無言語、是亦黃
泉傳語人」と言はれた、成程黒髮でも死なぬと云ふ事はない、是れも亦黃泉傳語人
あると言はれた。それから考へると盜むといふ事は無い筈のもので盜まれるもので
無い、盜みたいと思つても、自分の身體が全體取る可き處が無い、此の身體は皆破壊
して了ふものである、皆塚中の塵だ。故に此の身體が塚中の塵であるとの觀念が附け
ば何も執着する必要はない、處が塚中の塵と云ふことの觀念が無いから、多くは皆身
體に執着する、婦人などは尙ほ更身體に執着して居る、それ故死にたく無いといふ考
へを起すよりも、何時死んでも宜いといふ考を起した方が宜い。生れた以上は死にた

く無いと言つても、是は死ぬことに極り切つて居る、何時死んでも宜いといふ考を起
し、志を起した方が宜からうと思ふ。實間といふ人は、我物にあらざれば取る可らず
といふ事を考へたが、己れの物といふのは更に無い、六根か六塵に發して、物を見た
り、物を聞いたり、物を嗅いだり、物を味つたり、身體に觸れて肌が良いとか悪いと
か云ふ。それ等は何であるかと云ふに、此方に六根が有つて、向ふに六塵といふもの
が有る、中間に虚空が有つて、因縁和合して、見たり聞いたりする。丁度鏡に宿る影
のやうなもので自性は無い。又谷間へ行つてオーツと言ふと、谷の向ふて矢張りオー
ツと答へる、何も人間が居る譯では無い、響である。人間の身體も丁度谷の響のやう
なものである、斯く考へしならば何も取るものは無い、故に實間比丘は何も取る物は
無いといふので我相を離れた、此の我相を離れた時、實間比丘は悟を得たと言つてあ
る。なか／＼此我相が離れない、此の我相を離れて、眞に無我の者であるといふ事を
觀念せしならば、取るといふ念は起る筈ない、又取るといふことは色々有るであらう

と思ふ。日傭取りに行つて、一日丈けの日傭取の仕事をしなければ、矢張り日傭盗人と
言つても宜い。

夫れ故に此の天地の間には、全體盗まれるものは無い、其の根源を溯つて見ると、
盗まれるもので無い、何故かと言ふならば、皆佛性の現はれたものである。さすれば
佛性が佛性を盗むのである、我が精神の皆現れてあつて、精神が精神を盗むやうなも
のである。能く考へて見ると全體盗む根性といふものは、實に起されるものでは無い。
其の次は邪淫戒といふことである、佛教では正淫といふ事は許してある、自分の妻
は正淫で當然の話であるが、妻の外に道ならぬ様な事をするのは、所謂是れが邪淫で
ある。全體此色慾といふものは、餘程慎まねばならぬ、云ふまでもなく、國の破れる
のも、家庭の治らないのも色慾から多く始つて居る。社會の多くの出来事は色慾で、
下層社會の人に多いやうであるけれども、それが色慾に非ざれば財慾である。兎に角
一番の原因になつて居るのは色慾である、色慾は陰陽であつて、天地間の陰陽が狂つ

て來たらば變動が有る。一軒の家に於いても、陰陽が狂つて來たら家庭の不和を生ず
ることは極つて居る。

次は佛は妄語を戒めて居る、口といふものは悪口、兩舌、綺語、妄語といつて、口
が四通りの罪を犯す、口は禍の門と言ふれ共、口は福の門にもなる。悪く用ゐたな
らば口程悪い物は無いが、善く用ゐるならば口程善い物は無い、口が無ければ飲む事
も食ふことも出来ぬけれども、飲み過ぎたり、食ひ過ぎたりする事も口である、口は
禍の門にもなり、又福の門にもなる。處が此悪口といふものは中々慎めないもので
ある、知らず識らず人の悪口を言つて居る。人が三人以上集ると直ぐ人の悪口を言ふ
のである。又兩舌を使ふ、随分之れは器用なことではあるが、一枚の舌を以て二枚舌
を使つて、人を胡魔化しするやうな事が有る。綺語といふものは、飾り言葉であつて
人の氣に入るやうに操つる言葉。妄語といふは嘘、偽りて皆口の方に在るやうに思ふ
が、梵網經の中には、身心に妄語するとある、即ち口でも言ふが、心でも嘘を言ふ。

神様へ齒を痛めたゆゑに、梨を三年斷つと言つて願を掛けても、治るとそんな事を忘れて梨を食つて居る、それは心で嘘を言ふたのである、佛や神に向つて心で誓つた事をせぬのは心の妄である。富貴の人が貧賤の風をして居るのは身の上の妄である。分相應な風をせんければならぬ。身體でも心でも妄語をする、口ばかりが嘘を言ふものには無い。

九、佛道は信を以て能入す

佛は酒を戒めて居る、けれども佛敎の酒は無明の酒といふことである。御經文の中には、酒に三十六の過失ありと説いてあるものがあつて、女房子供にまでも、酒呑の人は嫌れ、秘密を守らず、時間を無駄に費すといふやうな事が、三十六擧げてある。佛敎で此の無明の酒といふ事は、是は自分の精神を朦朧と晦まして了ふのが無明の酒であつて、それ程身代も無いのに、書畫骨董などに迷つて、晦くなつたりして居るの

は、皆是れ無明の酒に酔つて居るのである。又碁將棋に酔つて了つて居る、或は色々な事に耽つて、執着して居るといふのは矢張り智慧が晦くなつて、道理が分らぬやうになつて來るので、凡て皆無明の酒と云ふものゝ爲めである、衲が或寺の門前の家へ盆の施餓鬼に行つて、其過去帳を見ると中に斯くの如き戒名が書いてある、家山一呑居士といふので、妙な戒名が有つたものであると思つて、家の者に尋ねると、ア、家山一呑居士ですかと言つて、其人は非常な酒が好きで、家も山も皆呑んで了つたこの事である。夫れ故に菩提所の和尚が無遠慮にも斯の如き、戒名を附けられたのであるとの話、附けらるゝ者も餘り氣の利いた、戒名では無からうと思ふ。

全體此の戒法と云ふ者は、吾人が此の世に生れると同時にちやんと具はつて居る。天地の開けると同時に、戒といふものは具はつたものである、是れを宗門では、佛々相續、祖々相傳、と此の事は道元禪師の著はされた、敎授戒文の中に言ふてある。佛と佛と相授け、祖師と祖師と相傳へる、そこで宗門では、持戒と云ふものがある。戒

法は元と信仰が入用であつて、戒の下に信といふものが有る、信といふものの中には戒が具はつて居る。指月和尚は信を以て戒源とすと言つてある、自分の精神が大丈夫落着くと云ふことの、一番の基礎となるのはなんであるかと言へば、即ち信である。佛道は信を以て能入とする、佛法の大海は、漸く入れば漸く深し、入れば入る程深いけれども、唯信を以て能入となるといふ事になつて居る。此の信といふものの中に戒法と言ふものは具つて居る、如何しても信が無ければ、幾ら物を聞いても、幾ら佛教を聞いても落着かない、物の道理は聞いて、分つて居るけれども落着かない、起き上りの達磨みたやうなもので、尻が本當に据つて居らないためにころ／＼する、それ故に宗門では、戒法といふものが有つて、それを佛から佛へ授け、衲の師匠から衲へ傳つて、佛々祖々、皆相傳相授して、始めて佛弟子となつた、衲が佛弟子となつた處で決心が附いて来る、それで戒法といふものは、皆生れると同時に持つて居る、けれども式作法に依つて、信ずる人に就いて、戒法を授からなければならぬ。元來精神の

方から言ふと、佛々相授、祖々相傳といふものが有つて、初て生れると同時に持つて来た、戒法といふものが顯はれるのである、天地の戒法と我が戒法と其時に一つになる。禪と戒といふものは、元來一つのものである、禪戒不二といふのは何んであるかと云ふと、天地の開けると同時にちやんと、禪といふものは具はり、亦同時に戒といふものも具はつたものだから、禪戒不二と云ふのである。併し乍ら不二ではあるけれども、禪の働きの澤山にあるにより、禪と云ふ名を附ける。戒の働きの多ひ方より、戒と云ふ名を附けるのである、轉迷開悟、迷を轉じて悟を開く是れが即ち禪の方であつて、戒の方は止惡作善である。けれども此の轉迷開悟の人は、惡を止めて善を作す人で、止惡作善の人は、轉迷開悟の人である。之れを譬ふれば、戒と禪とは丁度氷と水とのやうなもので、氷と水は一つの物ではあるけれども、暖氣に遇ふと水と云ふ名が付き、寒氣に遇ふと氷といふ名が附くので、元は一つであるが、働きの上て氷の働きと、水の働きと二つになつて来る。禪戒のこともそれと同じで、禪の働きの上に於

て禪といふ名を附け、止惡作善の働きをする上から、戒といふ名を附けたものではあるけれども、其の根源に行つて見れば、禪戒不二と言ふて宜からうと思ふ。

此の禪が我物になり、戒が我物になつた人は如何なる境涯にあるかと云ふに、禪と戒が頂上まで到ると、今日の人でも昔の人でも、皆同じ事て其の境涯になれぬ事は無い。それに付いて茲に問答がある。「洞山不安僧問、和尚、」之れは曹洞宗の中興開山の洞山大師が或時に病氣をした、するとなか／＼根性の悪い、坊さんが有つて、洞山和尚の處へ行つて「和尚病む、病まないものが有るか」と、和尚は今病氣をして居るけれども、病氣しないものがあるかどうかと言ふた。道がは洞山大師で何も狼狽はしない、夫は病氣しないものが有ると答へた、すると僧が言ふに「不病者和尚を看るや」と和尚は其病氣しない物を見ますかと斯う云つた、洞山が言ふには「病者が却て不病者を見る」己は今病氣して居るけれども、病氣しないものを見る事が出来る。僧曰く、「病者が不病者を見る時如何」それならば、病氣しないものを見るといふと、如何て

有るかと斯う言つた。すると洞山曰く「無有、病」全體身體の病氣した時に、病氣しないものが有る。人は身體を持つて居る、所か病氣するとその精神までが病氣してしまふ、私は身體は病んで居るけれども、病まないものを見て居る、病まないものを見る時には、己は病氣は有りはしないと答へた。衲は西有禪師に十三年就いて修行したが當代は實に有名な禪師であつた。禪師が島田在の傳心寺に隱居し居られたとき、相模の成願寺に江湖會が有つて、坊さんが三十人程附いて、衲も附いて行つた。其の江湖會の終ひ掛けに、赤痢の坊さんが有つて、其の赤痢の家で西有禪師は厠に這入つて、遂に赤痢に感染せられた、其の翌日送行といふので島田の傳心寺に歸つた。處が其の晩より大變な熱であつて、醫者の診察を受けると同時に、交通を遮断せられたのである。其の後三四日經つて、充分なる豫防法を施して、禪師の枕元へ行つて見ると、禪師は筆を手にして、引込んで居る眼に眼鏡を懸けて、元字脚の本へ朱點を切つて居る此の様子を見て實に衲は驚いた、斯の如き精神を持つて居つたからして、遂に七十七

歳の時分に病氣をしたけれども治つた。之れが即ち病氣して居つて病氣では無い、此れが所謂洞山大師が眞の不病者を見て、病ある事なしと言ふと同じことである。そこで洞山大師は亡くなつた、亡くなるといふと、澤山の坊さんが、皆涙を零し聲を揚げて慟哭したすると、洞山大師は餘程経つて、ウートと云つて蘇活られた、眼を開いて皆の泣くのを見て、會ふ者は必ず離れる、會つた者は遂に別れるに極まつて居る。己が死んだと云つてそんなに、泣いたり騒いだりする愚痴はいらないと云つて、七日の間愚痴齊を設け、八日目に又説法をして遷化せられたと、洞山大師の傳に書いてある是は死の上に於て既に死生を離れた人だらうと思ふ、生死を離れんければ、斯ふ云ふ事は出来るもので無い。

或人が其洞山大師の傳を見て、法慶和尚の處へ行つて、洞山大師は亡くなつてから又眼を開いて七日の間愚痴齊を設けて、八日目の朝説法をして眼を閉ぢられたといふ話をせし處が、其の和尚が云ふのに、洞山大師がさう云ふ事があるか、己が死んだら

どうか呼んでくれ、若し己が蘇生しなかつたならば、己の修行の力は無いと思へと言つた。それより段々と年月が経つてから、死なれる時に一切の物を皆人に呉れて了つた、自身は丸裸で以て亡くなられた、すると侍者の和尚が、平生息が引切れたら、己を呼んで呉れよといふ話であつたから、一つ呼ばうといふて、法慶和尚を三聲ばかり大きな聲で呼んだ、呼ぶと法慶和尚がスートと眼を開いた。そこで侍者は平生呼んで呉れよと言はれたから呼びましたが、今丸裸で亡くなられて居りますが、全體どう云ふ譯でありませうかと言つたら、法慶和尚が言ふに、己は生れて來る時に裸で生れて來たから、死ぬる時にも矢張り裸で死ぬと云つて、着物を被せやうとしても、そんな物は要らない、そんな着物は皆他の人にやつて了へと言つて、其時に偈を作られた、

「七十三年始ニ掣電、臨レ行爲レ君通ニ一線、鐵牛踰跳過ニ新羅、撞ニ破虛空ニ七八片」と言つて、眼を眠つたと云ふ事である。丁度七十三年であつたと見えて、七十三年は電のやうなもので、人間の一代は電が唯ピカ／＼としたやうなものだ。今行くに臨んで

即ち臨終の時に、お前の爲に茲に一線を通ずる、それで鐵牛といふ鐵で拵えた牛が、蹠跳ととび上つて新羅を過ぎて行つた。斯う云ふ處はとても思慮分別の及ぶ處で無いそれが虚空を撞破つて七八片する、此の虚空が七八片になつたといふことは、空の處にも止つては居らない。此が所謂沒消息、斷消息、却々此の人の境界は分別ではどうしても分るものではない、斯う言つて眼を眠つたといふのである。是れ等は皆禪と戒とが我物になつた、人て無ければ此の働きは出来るものではないと思ふ。即ち斯の如き事は禪と戒との何にか精神に、餘程大結着があつて、安心が無ければ如何にしても年を取つても顛倒するて有らうと思ふ。

十、禪と國民道徳

明治維新以來、我が國に於ては最大の速度を以て進歩し來りて、西洋の百般の文物制度は、輸入されて來て、誠に其の面目一新の意味に能く合うて居る。交通の便利の

ために、世界は大に縮少されて、世界のある地點で起つた波は、直ちに全世界の、隅みく々にまで及ぼして行くと言ふ具合で、社會は益々渾一的に進んで行くやうである其のために、好い事があれば又悪い事があると言ふやうなもので、物質主義だの、利己主義だのと言ふやうの思想が、西洋の方から這入つて來て、日本の思想界も幾分動搖して、其の弊として耻ぢを耻ぢともせず、人は唯だ利許りを逐うて、日も又足らずと云ふ有様で、黄金崇拜に驅られて仕まつて、道義であるとか、利他であるとかと云ふ美風は段々と、社會から消え失せて行くやうである。人間が唯だ我利々々主義に陥つて、自分一個の計を謀るにのみ致々として、道徳も何も顧みず、實に仕末も何もあつたものでは無いのである。新聞を見ると、賄賂であるとか、公盜とか、人殺しとか、聞くも忌はしい事柄が、三面記事に毎日の様に並べられて、それが必ずしも一階級に限られて居ないのである。此まゝに進んで行つたならば、吾が國は如何様になつて行くてあらうか、國家の永遠を思ひ、民族の隆盛を想ふならば、誰しも大に反省せねば

ならぬ秋と思ふのである。

而して畏れ多くも、先帝陛下には御在世中、一日も國家の事に就いて、又た國民の事に就て、御心配なさらなかつた事は無かつたと言ふ事である。御製に照るにつけ曇るにつけて思ふかな

吾が民草の上は如何にと

と、宣はせられてある。國民は君恩の忝さを知つたならば、身命のあらん限り、奉公の誠を致さなければならぬ。忠君愛國は戦争の時てなければ盡せぬと言ふ事も無く國民精神の緩んだ時、國民道徳の頽廢しさうな場合に、其の精神を引きしめて、國民道徳思想を高め、國家の基を堅めて行くと言ふ事も、一種の奉公である。殊に今日のやうな國家の思想界にも幾分動搖を來たし、且又た世界の大動亂の時に於ては、猶更の事である。其れには孔子が「其の國を治めんと欲せば、先づ其の家を齊へ、其の家を齊へんと欲せば先づ其の身を修む、其の身を修めんと欲せば、先づ其の心を誠

す」と言はれてある通り、何にも他人を顧みる事はしなくともよいので、先づ自分の心を鏡にかけて見るのである。果して自分は理に順じて、日々の行ひをして居るか、本分に外れては居ないか、誠心であるかと、回光返照の退歩を學する事が大切である。自己は肉の奴隷とならずして、靈性の昭々たる光明に依つて、動いたかと心を研くのが何よりである。家庭の紊亂と言ふも、國家道徳の腐敗と言ふも自己の墮落と言ふも歸する處は自分の靈性を昧ましたが根本である。貪瞋痴の三毒の煩惱のために、使はれて居るからである。「山中の賊は平ぐべし、心中の賊は平ぐ可からず」で、此の心中に潜む三毒の蛇は、却々執拗なものである。此の平げにくい三毒の毒蛇を追つ拂つて仕まつて、迷はざる自己に還ると言ふ事が、禪の要旨なのである。

今日吾が國民が迷はざる自己に誰しも歸つたならば、道徳の腐敗と言ふ事もなく、警察や監獄も用事は無くなつて來るのである、國家が此等の仕事のために、大なる費用を支出して居ると言ふのは、迷ふて人間が澤山居るからである。迷つて居る自己

であつたならば、如何に學力があつても、如何程高官な人であつても、それは皆根本が三毒の塊りであるから、必ず曲つた事をするのである。人が見て居らぬからと言ふて、横徑を踏んで見る、藏すより顯はるゝは無して、如何に内密にした事であつても、直ぐに現はれて来るものである。昔し一人の坊さんがあつて、瀋山禪師に向つて「百千萬境一時に来る時作麼生」と、瀋山禪師の脚下が如何なる風であるか、試験して見る勢で問ふて来た、すると流石は瀋山禪師である「青是れ黄に非ず、長是れ短に非ず諸法各々自位に住す、吾が事に干るに非ず」と答へられた、處が此の坊さん禮拜をして去つて仕まつたと言ふ事がある。此は借事問と言つて、僧が或る事柄を借りて問うて来たから、瀋山禪師も事柄をかりて答へられたのである。此の「吾が事に干るに非ず」の一言は、不迷の自己を徹見した人でなければ、言へる言葉ではないのである。此の問答を言葉を換へて言うて見たならば、「名譽と利欲と一所に持つて、買収に来たら怎うする」と問うて来たも同じ事である。瀋山禪師のお答は、名譽は名譽に

任せ、利欲は利欲に任す」と、瀋山は名利共に解脱して居るから、凡てに吾が事にあづかるにあらず、先づ世間話の意味から言へば、こんな譯であるが、實際に至ると、青是れ黄にあらず、長是れ短にあらず、諸法各々自位にありて、吾が事にあづかるにあらずと、大丈夫に行く事は却々六ヶ敷ひ、此の瀋山禪師の境涯を、玄樓禪師か「唯斯の萬種千般の境、一任す風雷の大虚を遠るに」と賞讃して居られる。風が吹いたからとて、虚空の破れた類例はない、雷が鳴つたからとて、虚空が汚れた事は無い、眞實自己の確立した人の境涯は、斯様なものである。吾等凡夫の胸中は此れに反して、汚され通し、破れ通してあるから、各自が大に回光返照して、迷はぬ自己に歸りて、宗教的安心を得て、佛法を吾が物にすると言ふ事が必要である。

是等が實地に現はるゝに到つた人は、人格の根柢を得た人である、斯かる人が説く道德には初めて力があり、斯かる人の宗教には、大なる權威があるのである。其外政治も、商買も、農工も、斯くして道と離れないのである。「心を誠にして其の身修まり

其の身修まつて其の家齊ふ、其家齊つて其の國治まるして、斯様な根柢があつて初めて出來た、健全なる人々より成れる所の、家庭でも、町村でも、國家でも皆實に健全であつて、是れが眞に本當の生ける淨土なのである。極樂は、西にもあれば東にもきたみちさがせ、みんなみにあり」の古歌と同じであつて、此の根柢を捉へて、迷はぬ自己に歸るのが眞の成佛であり、又悟道でもあり、禪でもあるのである。

佛教は何も年をとつた方々にのみ有用なものでは無くて、大に青年の人達に必要であるのであつて、佛教は個人の上から言つたならば、佛を作ると言ふ事が目的であるので、立派の人を鍛へ上げるのである。是れを社會的に言つたならば、淨土を作るに於いて、淨土とは立派な國家社會の事で、何も十萬億土と限つた事では無いのである、吾人は國家の一員であり、人間である以上は、其の根柢を握つて、此の國家の道徳を振興するやうにして、立派なる所の淨土を、此の日本に實現せねばならないのである。是れ等は皆吾等國民が奮勵努力せずして、誰が其の衝に當るであらうか。

「禪の骨髓」の後に

達磨、東土に來りて、二祖、衣鉢を傳ふ。少林會上の端的は、眞に擊石火の如く、閃電光に似たり。以心傳心の禪、直指人心の禪、そこに何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ。今吾が、秋野老師、特に「禪の骨髓」と題して、一卷を成す。或は言はむ、是れ好肉上の刺と。曷ぞ知らむ、是れ指月の指なることを。世の指に拈着するものは、則ち去れ。迷雲一たび拂へば、眞如の明月、耿耿として、天地こゝに朗然。これを、世に薦むる所以。

大正四年四月一日

高島米峰謹識

禪學文庫

第第第第第第第第第第第
 十二十一十九八七六五四三二一
 篇篇篇篇篇篇篇篇篇篇篇

老竹先忽老中先加老原老秋老釋先菅老竹老新先忽先大先鈴
 田滑原藤野原田井滑內木
 師生谷河南生師僧師宗生師師生谷生生
 默快天叫孝洞默石快青大
 著雷著天著捧著堂著運著道著演編禪著雷著禪著天著替著拙

禪漢和南劔禪禪拈禪禪修達青禪
 の士天客のの華林の道磨巒の第
 機禪禪禪捷骨微奇面禪陽禪一
 鋒集話話經髓笑行目話明話義

(近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊) (近刊)
 稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價
 八一八一八一八一八一八一八一
 錢圓錢圓錢圓錢圓錢圓錢圓錢圓錢圓錢圓

大正四年四月一日印刷
 大正四年四月五日發行



著者 秋野孝道
 發行所 高島大圓
 印刷者 佐久間衡治
 印刷所 株式會社 秀英舍
 東京市京橋區西紺屋町廿七番地

禪學文庫第八編
 定價金壹圓

發行所

東京市小石川區原町六番地
 電話東京一五六〇八六

丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文教に貢献せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の精緻に便に内容は處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 文學博士三宅雪嶺先生著(定價三錢郵稅六錢)
第一編 明治思想小史
- 文學士沼波理音先生著(定價七十錢郵稅八錢)
第二編 此 一 筋
- 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢)
第三編 來世の有無
- 大内青巒先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第四編 禪の極致
- 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第五編 予が婦人觀
- 釋清澤先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第六編 狐禪狸詩
- 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢)
第七編 噴 火 口
- 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第八編 ひとみの旅
- 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第九編 書窓 車窓
- シヨウ原著堺利彦先生譯(定價三錢郵稅八錢)
第十編 人と超人
- 文學博士村上專精先生著(定價七十錢郵稅八錢)
第十一編 六十年
- 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢)
第十二編 沈黙の饒舌

佛敎講義錄

僅に一ケ年で佛敎の大系が學び得られる 學界空前の佛敎講義錄出づ

佛敎がわからなくては日本の歴史の解釋が出来ない日本の文學も味ふことが出来ない日本文明の由來するところも知ることが出来ない従つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯讀三年俱舎八年では手もつけられないそこで隨にでも手つ取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので現代有数の學者に請ふてその專門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して社説な代作講義を掲載するが如きものと同一視するとなかれ

- 佛敎研究法 東洋大學教授 島地大等
- 佛敎概論 曹洞大學教授 加藤咄堂
- 印度の佛敎 帝國大學講師 萩原雲來
- 支那の佛敎 東洋大學教授 境野實洋
- 日本の佛敎 聖山大學教授 境野實洋
- 佛典の解説 帝國大學講師 常盤大定
- 法華經義釋 天台大學教授 島地大等
- 禪學要義 東洋大學教授 加藤咄堂
- 歐米の佛敎 東洋大學教授 渡邊海旭
- 佛敎美術 帝國大學講師 中川忠順
- 宗敎學要義 東京大學教授 廣井辰太郎
- 基督教綱要 慶應大學教授 足立栗園
- 神道綱要 慶應大學教授 足立栗園
- 其他臨時講義を増加すべし

每月一回十五日發行	冊簿判二百頁	滿一ケ年(十二冊)完結
一ケ月分	三ケ月分	半年分
一圓十錢	三圓十錢	五圓十錢
二圓十錢	五圓十錢	六圓十錢
三圓十錢	六圓十錢	七圓十錢
四圓十錢	七圓十錢	八圓十錢
五圓十錢	八圓十錢	九圓十錢
六圓十錢	九圓十錢	十圓十錢
七圓十錢	十圓十錢	十一圓十錢
八圓十錢	十一圓十錢	十二圓十錢
九圓十錢	十二圓十錢	十三圓十錢
十圓十錢	十三圓十錢	十四圓十錢
十一圓十錢	十四圓十錢	十五圓十錢
十二圓十錢	十五圓十錢	十六圓十錢
十三圓十錢	十六圓十錢	十七圓十錢
十四圓十錢	十七圓十錢	十八圓十錢
十五圓十錢	十八圓十錢	十九圓十錢
十六圓十錢	十九圓十錢	二十圓十錢
十七圓十錢	二十圓十錢	二十一圓十錢
十八圓十錢	二十一圓十錢	二十二圓十錢
十九圓十錢	二十二圓十錢	二十三圓十錢
二十圓十錢	二十三圓十錢	二十四圓十錢
二十一圓十錢	二十四圓十錢	二十五圓十錢
二十二圓十錢	二十五圓十錢	二十六圓十錢
二十三圓十錢	二十六圓十錢	二十七圓十錢
二十四圓十錢	二十七圓十錢	二十八圓十錢
二十五圓十錢	二十八圓十錢	二十九圓十錢
二十六圓十錢	二十九圓十錢	三十圓十錢
二十七圓十錢	三十圓十錢	三十一圓十錢
二十八圓十錢	三十一圓十錢	三十二圓十錢
二十九圓十錢	三十二圓十錢	三十三圓十錢
三十圓十錢	三十三圓十錢	三十四圓十錢
三十一圓十錢	三十四圓十錢	三十五圓十錢
三十二圓十錢	三十五圓十錢	三十六圓十錢
三十三圓十錢	三十六圓十錢	三十七圓十錢
三十四圓十錢	三十七圓十錢	三十八圓十錢
三十五圓十錢	三十八圓十錢	三十九圓十錢
三十六圓十錢	三十九圓十錢	四十圓十錢
三十七圓十錢	四十圓十錢	四十一圓十錢
三十八圓十錢	四十一圓十錢	四十二圓十錢
三十九圓十錢	四十二圓十錢	四十三圓十錢
四十圓十錢	四十三圓十錢	四十四圓十錢
四十一圓十錢	四十四圓十錢	四十五圓十錢
四十二圓十錢	四十五圓十錢	四十六圓十錢
四十三圓十錢	四十六圓十錢	四十七圓十錢
四十四圓十錢	四十七圓十錢	四十八圓十錢
四十五圓十錢	四十八圓十錢	四十九圓十錢
四十六圓十錢	四十九圓十錢	五十圓十錢

發行所 東京 小石川區 原町六丁目 電話 六八六二 丙午出版社

「高朝報」記者 大住嘯風先生著
現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵税金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむには其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ率りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす尙にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

幕村隱士 久津見藤村先生著
現代八面鋒

定價金八拾錢
郵税金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせざ之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

幕村隱士 久津見藤村先生著
眞人偽人

定價金壹圓
郵税金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の聲命を蒙ること亦數次聊か瘖癡を起して朝野の名士一十餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

堺利彦先生著
樂天囚人

定價金六拾錢
郵税金六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、殘忍、無恥、停滯を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる著者之一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文集

定價金壹圓
郵税金八錢

卷頭之語 著者の友人先賢六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短諸奇抜痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す 五、逆徒の古風 六、予の夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇一谷川の水(バーナード、ショウ原作) 第四編 告白、荒畑寒村 二、タレントタビユ、大杉榮 三、痴漢人耶穌、高島茶之

堺利彦先生著
自傳赤裸の人

定價金九拾錢
郵税金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓蒙せらるる波瀾重疊神田鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは遺識能文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

カウツキー先生原著
社會主義倫理學

定價金壹圓
郵税金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるる今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるる人日本の學界と文壇とは總に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論

定價金七十錢
郵税金八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道をして今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間等に此一巻を著す所論痛絶快絶行文悲絶絶倫嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を抹殺したるは抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憤讀を冀ふ

文學士 渡邊又次郎先生著
最新論理學

定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる精潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤 鳴堂先生著
筆と舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上 博士 序
藤井 瑞枝女士著
亂れ雲

定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井立正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁風刺諷刺皮肉或は鋭き觀察或は隠れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者
伊藤 禮信先生著
新氣運

定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈喧嘩輕侮憎惡の中に立ち體面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

三宅 雪嶺先生序
高島 米峯先生著
廣長舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤鳴堂先生曰はく「米峯今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々當世の大文字」と

加藤 弘之先生序
高島 米峯先生著
惡戰

定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

島田 三郎先生序
高島 米峯先生著
理想的商業

定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客成並つて商人尻と垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學 澤柳政太郎先生序
櫻井 于河岸 實一先生著
修養史譚

定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を讀くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵
林 董閣下 譯
修養の模範
定價金七拾錢
郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美談の乏しいのに頼り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを愛へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を成すに至つたのである此書は世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生著
俗修養論
定價金壹圓
郵税金八錢

古聖實踐の芳蹟を辿り前賢研究の結果を收め苟も規範とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美談は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す悉くはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

文學博士 村上專精先生著
改訂 **信錄**
定價金六拾錢
郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり昔々巴の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ
定價金四拾錢
郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著
女性訓
定價金四十錢
郵税金六錢

本書の内容は天職中脩養兼節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフォード大學總長
マジョルダン博士原著
中村 平先生譯
人物の修養
定價金五十錢
郵税金八錢

澤柳南文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「マジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること妙からざるは言を持たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウキリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
處世 **自己測量**
定價金五十錢
郵税金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我が現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の穢朴人格完成の爲獨立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり

黒岩周六先生講演
人生問題
定價金七拾錢
郵税金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の問ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東北大學總長
澤柳政太郎先生著
退耕錄
正價金 壹圓
郵税金 八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はずりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百段の問題に逢着して滿腔の所感を披露したるものなることを觀刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣短あり理窟あり警策あり遊戯せざるも時勢に阿らず誠にして憂世の大家文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フエヒネル先生原著
文學士 平田元吉先生譯
死後の生活
定價金 五拾錢
郵税金 八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を夢へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼圖靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑念に苦しめる者の無二の慰神となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

杉村巖橋先生譯編
強肺病全快談
定價金 九十錢
郵税金 八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣薬に欺かれたる人々は本書を讀いて天來の福音に接せよ

文學博士 井上圓了先生著
南半球五萬哩
定價金 九十錢
郵税金 八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南河南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間山嶽水國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十餘上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著
活佛教
定價金 壹圓拾錢
郵税金 八錢

明治の宗教界思想界を震撼せしめたりし「佛敎活論」は完成す爾後の活佛寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの福音

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著
國民と宗教
定價金 七十錢
郵税金 八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演説講話の好模範たるべし◎附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生著
文學士 羽溪了諦先生著
釋尊の研究
定價金 壹圓
郵税金 八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の譯論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著
彌勒淨土論
定價金 壹圓
郵税金 八錢

宗敎學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要な地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大憾事ならざる由來淵源を詳論し博士の著「極樂淨土論」と相俟つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

ボーレル、ケールス先生著
 學習院教授鈴木大拙先生譯
阿彌陀佛
 定價金三十五錢
 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケールス博士その彩筆を揮ひ
 哈ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好
 評噴々たることや弊社に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる
 大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶
 ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
 文學士 常盤大定先生著
釋迦牟尼傳
 定價金七十錢
 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神祕なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺し
 て顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見
 ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等
 の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以
 て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著
孔子傳
 定價金壹圓四十錢
 郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその
 論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未
 曾の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足
 るところ

高等師範學校講師
 互理亭三郎先生著
王陽明
 定價金一圓五十錢
 郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて靡
 觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟
 徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の
 實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しか
 の歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
 增野實洋先生著
增聖德太子傳
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

佛教史家として夙に名ある増野先生が其の燃厚なる史眼と圓熟せる文
 才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を
 叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明
 快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内青樹先生序
 高島米峰先生著
一休和尚傳
 定價金九十錢
 郵税金八錢

元日に懶懶を擬題はして人の度胸を抜き末期に糞を嗜つて梵天に捧けた
 彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうとも
 せず一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた
 一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
 忽滑谷快天先生著
達磨と陽明
 定價金壹圓拾錢
 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼
 目を豁開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格榮
 成等一として傳はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳
 の指導者たり

明楊起元評註
 加藤咄堂先生和譯
和譯維摩經評註
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明した
 るものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し佛調を附し
 て通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び譯を談せむと欲する者には
 勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著
原人論講話
 定價金六十錢
 郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の巔然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし吾者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著
通俗講話の理方法
 定價金九十錢
 郵税金八錢

通俗教育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感じせしめ得べきかの理論と方法を極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一巻の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を精かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
 釋 潭先生著
寒山詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
 釋 潭先生著
和漢名詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎巖以後絶海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
 忽清谷快天先生評釋
名士參禪集
 定價金五十錢
 郵税金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡張翥等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の實權に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の錯雜に接するを得しむ

マクス、ミユラー博士原著
 文學士 清水友次郎先生譯
宗教學綱要
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミユラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授
 文學士 野々村直太郎先生著
宗教と倫理
 定價金五十錢
 郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道徳論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との競濁に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗教論を評す

眞宗補敎 北條慈證先生著
眞宗の教義
 定價金二十圓
 郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の遺著を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資應如上人との教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力敎の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を費ふ

アー、エフ、ステンツラー先生原著
 フクトル、フイロツフェル先生増訂
梵語入門
 荻原雲來先生譯補
 定價金壹圓
 郵税金八錢

文學博士 高楠順次郎先生編
 曹洞宗大學教授
 立花俊道先生著
巴利語文典
 定價金壹圓
 郵税金八錢

慈雲尊者真筆
 高楠順次郎先生序
 阿彌陀佛先生著
悉曇阿彌陀經
 定價金壹圓
 郵税金八錢

平子輝敬先生遺著
補校 法上王帝說證註
 定價金壹圓
 郵税金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成た歐語の梵文典を使用すされど
 歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格
 低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむ
 がために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は
 僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること
 と多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる
 巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には
 多大の注意を拂ひて節より繁に入り易より難に進むの方法に從ひたれば
 初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべ
 し

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち維摩詰經大乘
 經なり特に悉曇と冠せしは新體梵字に簡げんが爲なり梵文に加ふるに
 漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をあげ終りに訂
 正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一編を窺
 ふに易からん

「上宮聖德法王帝說」はその記事切實その文詞醇古多く寧樂巴往の記録を
 取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅すを須む
 す而して狩谷掖齋先生の「證註」に至つては詳説を折衷し正誤を辨別して
 先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多
 少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子輝敬先生博覽強記にして史
 眼犀利掖齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足ら
 ざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生編
科註 原人論
 定價金十二錢 郵税金二錢
科註 大乘起信論
 定價金十六錢 郵税金二錢

高島米峰先生著
 學生參考
洋史
 定價金十三錢
 郵税金二錢

文學博士 三宅雪嶺先生著
偉人の跡
 定價金壹圓
 郵税金八錢

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置
 きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべか
 らむも學生を養くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑
 はざるなり」と

古今東西の偉人数十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を
 明にす觀察發掘にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面
 目は躍如として茲に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にし
 て修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せし
 か社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉
 著に問へ

博士の學殖富贖に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あ
 り今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を
 語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散
 じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著
明治思想小史
 定價金五十錢
 郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深遠の觀察を逞しうして對切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからざる果して然らば此書これに大正國民必讀の書

文學士 沼波瑠音先生著
此筋
 定價金七十錢
 郵税金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそらな方にのみ、これを借む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛敎徒同志會編
來世之有無
 定價金七十錢
 郵税金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著
現代青年論
 定價金十五錢
 郵税金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し
 一、青年の力
 二、今の青年は依頼心が強い
 三、今の青年には氣概がない
 四、今の青年は成功を急ぐ
 五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する
 六、今の青年は思想が衰弱である
 七、今の青年は信仰が乏しい
 八、今の青年は同情が乏しい

記者 松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊藝文
 一冊廿二錢
 半年分一圓廿錢
 一年分二圓卅錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關也
 『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し最嚴密深淵の批判を下さむとする者也
 『藝文』は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

『東京朝日』記者
 杉村春人冠先生著
ひとみの旅
 定價金六十錢
 郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の畫を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。會て、陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又會て、嚴禁の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
 定價金六十錢
 郵税金八錢

天地の秘奧を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地響あり、人情あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の徳澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でては車窓の益友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授 帝國大學講師 鈴木大拙先生著
スエデンボルグ
 定價金五十錢
 郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の通譯者、學界の偉人、神祕界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、通俗説話の高手、之を一身を集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲瀾々まことに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此書成る所以。

文學博士 村上專精先生著

六十一年

定價金九十錢
郵税金八錢

これ村上博士が過去六十一年間悪戦苦闘の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て興奮とすべき絶好の立志傳たり。殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する思惟なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり。

文學博士 松本文三郎先生著

佛典の研究

定價金九十錢
郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー。惜多其の遺著を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに最近幾多の位に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先賢未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず。

久津見 藤村先生著

ニイチエ

定價金九十錢
郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理想ニイチエの飄逸に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其飄忽の想と奇矯の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士 松本文三郎先生著

増補 宗教と哲學

定價金七十錢
郵税金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と遺傳」「研究と信仰」等次第を送うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎。

大内青陽先生著

禪の極致

定價金六十錢
郵税金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ることも能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむる古來禪を説くもの、大に難解の語句を弄して、人をして愈々出て愈々迷はしむることを、大内先生學深く徳高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、四玄の理を説き、深遠の法を語ることを、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位頌講話」また先生獨創の見識を以て、縱横に講解す、蓋近來の大文字なり。

黒岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢
郵税金八錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

記者 益月、咄堂、我觀、米峰、黃洋、縱橫、秋畝、大拙

佛新

一冊十六錢
半年分一圓十錢
一年分二圓

「新佛教」は自由討究傳説排斥の大義に基き吾人の全精神を満足しつべき新信仰を鼓吹し今日の時世に適應すべき新道徳を扶植せむとするものなり
「新佛教」は光明を求め大道を傳ふ法を賣り道を嚙くものにあらず
「新佛教」は自主獨立能く言ふべきを言ひ語るべきを語る他の保護の下に開闢して言ふべきを言ひ得ず語るべからざるを語るが如き者にあらず

釋 清 潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢
郵税金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の冥狸詩の窟一躍して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれ讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

釋清澤先生主筆
月刊 漢詩

一年分五十錢

釋清澤先生を中心とする漢詩研究社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晚晴樓文鈔

定價金八十五錢
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり銘あり跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを撰編とせば又良師なきを憂ふるを須むざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を説く文を論ずるの體裁を成す縁陰深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口

定價金八十錢
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその著者「噴火長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆
月刊 人道講話

一冊 七錢五厘
一年分八十二錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者
「人道講話」は教育と宗教と道徳との三面を有す
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要諦とす
「人道講話」は父母の孝養を以て道徳の大本とす

東京大學教授土屋鳳洲先生編
唐宋八家文鈔

定價金四十五錢
郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな魯秋濤論初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺傳となし八大家の名文中更にその精選五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師鈴木大拙先生著
禪の第一義

定價金一圓
郵税金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を説述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實踐の歷程を精叙しその所得の公案を解説し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除くせむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代的神色の頗る鮮なるものあるを看取し得む

内田魯庵先生著
沈黙の饒舌

定價金八十錢
郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその旨の懇切なるその論を穩健なる談に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄説と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯
新エルサレム

定價金六十錢
郵税金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

人 と 超 人

定價金九十錢
郵税金八錢

シヨウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、シヨウウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人(松居松葉)等あり

おばけの正體

定價金五十錢
郵税金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者懐い者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の真相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聴きたがる小供のためにも「幽霊の正體見たり枯尾花」など、悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

青 巒 禪 話

定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう深山なりそれ以上廣告文でコケを成す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡聖の如きを讀者の擇ぶところに委するのみ

印度哲學宗教史

定價金貳圓
郵税金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を増補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵書、奧義書、經書及び諸學派の開闢に涉り洵にこれ印度の根本思想を説述して盡さるべきものなり無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘藏を擁らざるべからざる也

修 道 禪 話

定價金一圓
郵税金八錢

新井石禪老師は學に於て徳に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に満足し邪禪に墮在するもの多からざるを見て慈心到底黙止するに堪へず茲に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不説の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明明

神 智 と 神 愛

定價金一圓半錢
郵税金十二錢

本書は天界地獄の通歴者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

店 頭 禪

定價金八十錢
郵税金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄聲堂の板場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實験也信仰の告白也

禪 の 面 目

定價金一圓
郵税金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の説とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆 菅原洞禪師著
禪林奇行

定價金 壹圓
郵税金 八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履證刺たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

釋宗演老師著
拈華微笑

定價金 壹圓
郵税金 八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師
トーマス・カービー先生著
英文佛敎讀本

定價金 五十錢
郵税金 六錢

著者は敬虔なる佛敎信者として熱心なる佛敎研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛敎傳播に盡し、狀況及歐米に於ける佛敎學者の筆に成れる論文英語に翻譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛敎の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章蓋し佛敎學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師 萩原雲來先生著
梵漢佛敎辭典

定價金 五圓
郵税金 十二錢

本書收むる所顯密二敎の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器皿數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豊富にして單に佛敎辭典としてのみならず又梵漢辭典として未曾有の寶藏なりこれを以て佛敎を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取ても亦唯一無二の寶典たり

325
235

9.11.15

終

